日本醫史學雜誌

第18巻　第3号

昭和47年9月30日発行

第73回日本医史学会総会

講　演　抄　録

（昭和47年9月16・17日　仙台市）

通　巻　第1389号

日　本　医　史　学　会

東京都文京区本郷2～1～1
順天堂大学医学部医史学研究室内
振　替　口　座・東京15250番
電　話　(813) 3111　内線544

目次

特別講演

仙台と蘭学……山形敞一……(1)
高野長英と蘭学……大鳥蘭三郎……(6)
蘭学と大阪……中野操……(9)

一般講演

日本医学放射線技術史上の石田熊治郎について……今市正義……(13)
医学およびパラメディカル教育における制度史—とくに日本における特長—……柴田幸雄……(13)
明治期学校衛生史の研究　九　—学校身体検査制度—……杉浦守邦……(14)
星野良悦の解屍……中山沃……(16)
藤井方亭の生家について……茅原弘……(18)
七科約説と太田用成……土屋重朗……(18)
佐伯理一郎（一八六二—一九五三）留学日記（米・独・墺・英）……阿知波五郎……(19)
日仏医学交流に貢献した茂木蔵之助……古川明……(22)
ターヘルアナトミアについて（その一）……酒井恒……(23)
解体新書と重訂解体新書を比較して……酒井シヅ……(25)
西説内科撰要について……大滝紀雄……(26)

植学啓原における遺伝学……矢部一郎……(27)
卯辰山養生所について……津田進三……(28)
古代バビロニアに於ける医療について……鈴木哲哉……(29)
古代印度医学と仏教医学との比較（一）……石原明・杉田暉道……(30)
日本先史時代の暦法 ―月名の解明と生産呪術の考察を中心として……三輪卓爾……(31)
奈良時代庶民の人口ピラミッドおよび死亡……日野英子……(32)
「医学天正記」の研究（第二報）……矢数道明……(33)
戦国武将の医学意識と医道伝授……宮本義己……(34)
禅宗僧の延寿堂について……関根正雄……(35)
徳島県における漢方医存続運動について……福島義一……(36)
旧約聖書時代の衛生状態……小沢吉見……(37)
泰西医学と数学……大矢全節……(38)

評伝

頼山陽の病志（二）……富士川英郎……(41)

資料

近世日本医学の先覚者―相良知安文書の研究―……鍵山栄……(51)

雑報

特別講演 一

仙台と蘭学

山形敞一

まえがき

仙台における蘭学を考察する場合には、仙台藩祖伊達政宗の南蛮遣使の意義を忘れてはならないと思う。しかし伊達政宗の遣欧使節であった支倉常長が帰国したときはすでにキリシタン禁制となっていたため、その事蹟は公表されなかったが、仙台藩医員のうち外科医員のほとんどすべてが南蛮阿蘭陀流外科であったことは、注目すべきことであろう。

仙台藩の医学校においては、全国にさきがけて文政五年（一八二二年）蘭方外科、文政六年蘭方内科が置かれたことは、当時の仙台藩医員一一八家のうち外科（瘍科）の一七家がすべて南蛮阿蘭陀流外科であったことと無関係ではない。

また、杉田玄白と有名な「和蘭医事問答」を行なった建部清庵は仙台藩の支藩一ノ関の田村侯の外科医員で、阿蘭陀流外科を学び、その弟子である大槻玄澤ならびに佐々木中澤はいずれも江戸に出て大成し、仙台藩の蘭学に貢献するところが多かった。ことに、仙台と蘭学の関係を考えるのに大槻玄澤の存在を忘れることはできない。しかし、仙台における蘭学の據点となったのは仙台藩の医学校と養賢堂である。

仙台藩医学校における蘭学

仙台藩の医員は藩祖伊達政宗の頃は内科八家、外科三家、鍼家一家、眼科一家に過ぎなかったが、五代吉村の時代には九十五家に増加し、医員の子弟も多くなり、なかには家業不精の者もあったので、仙台藩の学問所において医書講釈を行

なうことになり、宝暦十年（一七六〇年）より藩医だけでなく、家中医や町医などに対しても医書を講釈した。

しかるに、文化七年（一八一〇年）養賢堂学頭となった大槻平泉の学制改革案によって学制が整備されることになり、文化十四年（一八一七年）三千名を収容する大講堂が落成した。

大槻平泉が文化七年四月に提出した学制改革案には医学校分離案があり、さらに同年五月大槻玄澤の上書した「御医師育才呈案」にも医学館分離造営が建白されているが、この情勢に応じて文化八年養賢堂医学講師に抜擢された渡部道可も医学校の分離造営を要請し、文化十二年医学校学頭に任ぜられ、文化十四年（一八一七年）百騎丁（現在の東二番丁の仙台北警察署）に医学校が創建せられた。

医学校は藩医の子弟を教育するのが主な目的であったが、仙台藩の外科医員一七家は多くは南蛮阿蘭陀流外科であったから、これらの子弟を教育する外科教授として、漢蘭折衷派の華岡隨賢の高弟猪股松順が文政二年（一八一九年）に任命された。

しかし、初代学頭渡部道可は医学校における外科は西洋医術を講じなければならないという信念を持ち、文政四年五月幕府外科医官桂川甫賢に人選を依頼し、甫賢と大槻玄澤の推薦で文政五年（一八二二年）三月着任したのが一ノ関藩医員佐々木中澤で、これがわが国の医学校に西洋医学講座を設けた嚆矢である。

なお、仙台藩医学校以外の諸藩の医学校で西洋医学を教授したのは、いずれも仙台藩より遅く、松江藩は天保十二年（一八四一年）、佐倉藩は天保十三年、佐賀藩は嘉永四年（一八五一年）、金沢藩は安政元年（一八五四年）、会津藩は安政四年、徳島藩は安政五年、徳川幕府は文久元年（一八六一年）、秋田藩は慶応二年（一八六六年）、高知藩は慶応三年である。

佐々木中澤は文政五年三月医学校の外科助教として着任後、蘭科を拡張することになり、馬場佐十郎塾の同門で、さらに吉田長淑より和蘭内科を学び、郷里の鶴岡で開業していた小関三栄（天保六年幕府天文方出仕にあたり三英と改む）を

招聘することになり、文政六年十月仙台に着任した。

医学校の蘭科は中澤と三栄を中心として活況を呈し、医学校内に天文台を設置し、幕府の天文台と同様に蘭書飜訳を行なう計画をたてたが、文政七年八月渡部学頭が急逝したため頓挫し、文政八年三月中澤と三栄とは相前後して医学校を辞職した。

渡部道可の急逝後奥村玄安と河野杏庵が相次いで学頭になったので、中澤と三栄の後任は任命されなかったが、仙台藩医員で長崎に遊学した者も少なくなく、ことに養賢堂の蘭学局総裁となった小野寺丹元、医学校学頭となった原玄杏、大井長嘯などが著名である。

医学校の藏書には洋本と唱えられる蘭書があり、「ブランカルツ解剖書」(六本)、「イギリスヲールデンボック」(一本)、「ゴルテル」(一本)、「ハルマ」(二本)、「ヘイステル」(二本)が藏されている。これらは小関三栄の着任後に購入されたもので、医学校蘭科の拡充に資する目的だったと思われるが、中澤と三栄の辞任後は養賢堂だけが蘭書を購入するようになった。しかし、奥村学頭以後になっても「重訂解体新書」、「遠西医方名物考」、「眼科新書」、「新訂増補和蘭藥鏡」などの訳書が引きつづき購入されて、医学教育に利用されていた。

医学校における中澤と三栄

佐々木中澤は桂川甫賢と大槻玄澤の推薦で文政五年三月医学校の外科助教として仙台に着任したが、文政二年に刊行された玄澤の「瘍医新書」の誘導編の校訂に従事しただけでなく、さらにその刺絡編の訳述を担当して「増訳八刺精要」を刊行している。本書は文政四年十月稿了していたが、文政八年出版された。また中澤は桂川甫周の命によりゴルテルの外科書を訳述して文政五年二月「瘍科精選」を稿了したが、本書は宇田川玄隨がゴルテルの内科書を訳述した「内科選要」と対応するものである。

中澤は仙台着任後間もない六月二十九日渡部学頭総指揮のもとに、医学校職員生徒とともに仙台の北郊七北田の刑場に赴き、自ら女囚の解剖を行ない、とくに婦人生殖器について「存眞図腋」を著わした。次いで文政五年九月、わが国第一次のコレラ流行に際会し、浪華の斎藤方策、江戸の大槻玄澤らと書信を交換し、本病をコレラと断定し、「壬午天行病説」を著わして、コレラの症候、治法、予防などを述べた。また、当時官庫の秘書とされた「厚生新編」のうち大槻玄澤の訳出したものを借覧して葡萄酒の新醸を計画した。

小関三栄は渡部道可と佐々木中澤の招聘により文政六年十月仙台に着任し、直ちにコンスブルックの内科書を飜訳して「西洋内科大成」と名づけた、本書は文政七年一応校了したが、天保三年三月訳述が完了した。三栄は養賢堂蘭学局訳員庄子玄琢と親交を結び、医学校の蘭学を興そうと計画したが、渡部学頭の急逝のため挫折し、文政八年三月辞任して鶴岡に帰った。三栄は文政十年八月再び江戸に出て、天保三年一月岸和田藩医員となり、天保六年四月幕府天文方の訳員に任ぜられ、「厚生新編」の訳述に従事したが、天保十年五月蛮社遭厄の際に自刃した。

養賢堂における蘭学

養賢堂に蘭学方が置かれて蘭書飜訳が始められたのは大槻平泉学頭の時代である。平泉が洋学の必要性を痛感したのは、享和元年、二十九才で長崎に遊学し、中野柳圃について蘭学を修めたのち、文化七年（一八一〇年）養賢堂学頭に任ぜられ、文政二年（一八一九年）藩命により「俄羅斯版万国輿地図」を訳述したことによる。平泉は山村才助と馬場左十郎の訳書を参考にして文政四年漸くその大略を訳出したが、門人小野寺丹元を江戸に遣って和蘭語と魯西亜語を学ばせ、さらに文政五年（一八二二年）十一月医学校助教の庄子玄琢を養賢堂の蘭学和解方に登用し、蘭書飜訳に従事させた。

したがって、養賢堂の蘭学は医学校の蘭学と相前後して、文政五年に始まったのである。

次いで、大槻玄澤の長子玄幹は文政六年十一月養賢堂蘭学局（蘭学方）の相談役となり、蘭書飜訳に参劃し、文政七年

八月には「蘭学凡」、文政八年七月には「和蘭接續詞考」を蘭学局に進呈し、初学入門の一助とした。このとき飜訳事業のため、マリンの「コンプレット・ネーデルドイツチュ・エン・フランス・ウォールデンブック」、ヒューブネルの「ウォールデンブック」、マルチネットの「カテヒスムス・デル・ナチュール」などが購入された。

小野寺丹元は文政七年まで江戸に出て和蘭語と魯西亜語を学んだのち、文政十一年から天保五年まで長崎に遊学して中山作三郎より蘭学と魯西亜学を学び、さらに江戸の川本幸民に入門して蘭学を学び、嘉永二年（一八四九年）仙台藩医員に登用され、魯西亜阿蘭陀両和解方引切に任命された。丹元は安政三年（一八五六年）にレオポルド・ハン・ベルクトルドの一書を飜訳して「済世一方」を著わし、わが国において初めてペストの予防と療法を述べた。

丹元は安政六年幕府の藩書調所教授手傳役に任命されるまで養賢堂の蘭学局総裁としてその拡充整備に努め、ことに蘭学方に魯西亜学和解方を設置し、洋学研究に盡力した。

嘉永三年（一八五〇年）父平泉の後を承けて養賢堂学頭に任命された大槻習斉はさらに蘭学方を拡充して、西洋式の大砲・火薬および軍艦「開成丸」を製造して藩士の調練を行ない、また開物方を設けて製塩、織物、陶器などの産業を開発した。

養賢堂には安永八年（一七七九年）以来付属書庫があり、天保年間には一七一八三冊の書籍を有し、生徒らの閲覧に供されていた。また、このなかには蘭学楷梯、西音発微などの和蘭文法書のほか、多くの洋書が購入され、蘭語辞典だけでなく、英蘭、葡蘭、蘭仏、仏蘭、仏露、蘭英、蘭独、独羅甸などの辞典類があり、医学に関する蘭書も諸分科を網羅しており、さらに初学者用の教本が多数用意されていて、洋学講習が行なわれた。

このように、大槻平泉、習斉両学頭の拡充方針により養賢堂の蘭学方は次第に発展し、医学校の蘭科に代って仙台藩における蘭学講習の中心となり、医学校生徒も医学を勉強するかたわら養賢堂蘭学方に通学して蘭学を講習していたのである。

（東北大学医学部教授・内科学）

特別講演　二

高野長英と蘭学

大鳥蘭三郎

日本の近代化に蘭学が英学にさきがけて大きく貢献したことはここにあらためていうまでもない。江戸時代初期に来日を許されて平戸のちに長崎出島のオランダ商館員たちによる西洋文化の傳来、十八世紀初期の長崎の通詞たちの西洋文物の紹介、同じく後期の江戸における本格的蘭学学習の勃興などはいわゆる「蘭学創始」となって結実し、「解体新書」の刊行を見るに至った。

高野長英は文化元年（一八〇四）五月五日に奥州胆沢郡水澤に生まれ、嘉永三年（一八五〇）十月三十日に江戸青山で死んでいる。その四十七年の一生は波瀾万丈のものであったと称せられているが、長英が学問で身を立てようと決意した頃はちょうど蘭学はまさに爛熟の極に達していた時である。ここでは長英と蘭学との関係に焦点をしぼってのべてみようと思う。

長英の学問の精髄は蘭学に在ったといえるが、七、八才の時から外祖父高野元端について漢学を学び、十二才の時に早くも漢学を教えたといわれている。後年蘭学者として名を為した人たちはその若年のころしっかりとした漢学の素養を身につけていたことは多くの実例が示すところであるのは周知の通りで、長英の場合もその例外ではなかった。

長英の蘭学への志願はいつ頃から立てられたのであろうか。この点についてはよるべき確かな史料が知られていないのは残念であるが、その養父に当る高野玄斎（一七七五（安永四）―一八二七（文政十））は江戸に遊学して、杉田玄白についてオランダ医学と

蘭学とを修めて文化二年（一八〇五）に故郷に帰っていた。文化十年（一八一三）十才の時に母方の実家高野氏を継ぐことになり、後藤氏より高野氏へ姓をかえた長英は主として外祖父高野元端の養育を受けていたが、また養父玄斎からの影響もなくはなかったと推考するのはそんなに突飛ではない。

文政二年（一八一九）、祖父高野元端（一七四一（寛保一）―一八一九（文政二））が死んでからは養父玄斎の薫陶を専ら受け、長英の蘭学への傾斜は一層顕著になったものと考えられる。文政三年（一八二〇）春、十七才の時に江戸へ遊学した長英は苦学を續けている間に、文政四年につてを求めてオランダ内科を標榜していた吉田長淑（一七七九―一八二四）の学塾にはいり、学僕としてはじめて正式に蘭学を学んだ。

二、三年にして長英の蘭学の力は大いにつき、「訳鍵」の写本を手に入れて、オランダ書の翻訳を試みようとするまでになった。しかし、長英の蘭学の力を大いにのばしたのはなんとしてもその長崎遊学に在ったことは確かで、疑いの余地はないものと考える。

文政八年（一八二五）七月、長英は二十二歳の時、長崎の人今村甫庵の帰郷に随伴して念願の長崎行を決行した。長崎へ着いた長英は幸いにも当時長崎に来ていたシーボルトに就学することができた。これによって長英の蘭学の力は一挙に増進し、それにともなってヨーロッパの新知識を身につけたのである。

シーボルトの門下にあった頃の高野長英の学問的動静を知る好資料として見のがすことができないものに、昔のベルリンにあった日本学会（Japan Institut）所藏のシーボルト文獻（Sieboldiana）と称するものがあった。あったというのは第二次世界大戦によって、今日なおその所在が判明しないからである。

このことは大いに残念であるが、このシーボルト文獻が昭和九年に東京にある日独文化協会に貸与されたことがあった。この時にはこの文獻を研究する委員会ができ、私はその一員として加わり、その文獻を研究する好機会に恵まれた。

總数三百点餘りのその文獻のなかで、私が最も注目したのはシーボルトの日本人門人たちがシーボルトへ提供した四十二点のオランダ語の論文である。これについてはすでに発表したので、ここに再び述べることはしない。

ただこれ等のオランダ語論文のなかで、ことに目をひくのは、その中には高野長英が書いたオランダ論文が十一篇もあることである。このことはそれ自体だけでも断然群を抜いているのであるが、さらにくわしくしらべてみると長英が書いたオランダ語論文の量は一層多く、きわだっている。

しかし、量のみではなお決定的のことはいえないので質的にこれらの論文を調べてみると長英が書いたものには特長が多く見られる。それ等のことを例證をあげて説明することにする。

これ等のオランダ語論文は長英の日本語からオランダ語へのいわば作文能力を示したものであるが、その一方、オランダ語から日本語への訳述になるものもまた少なくない。これ等を通じてもまた長英の著訳書がいずれも独特の、すぐれたものであることが知られる。

結論として、長英の言動のすべてはその蘭学の力にもとずいていると言っても言い過ぎでは決してない。実に蘭学者としての高野長英に関する談話の一節に、「天保・弘化の頃には、隨分蘭学者が江戸にあった。けれども、皆医業の傍ら、手業に蘭学をやるものだから、兵書など自由に讀めるものはなかった。其の中に優れたものは高野長英であった。あの人は書物はよく讀めたよ——」とあるのは全く当を得たものといってよく、決して褒め過ぎの言葉とは私には思えないのである。

（慶応大学医学部教授・医史学）

特別講演　三

蘭学と大阪

中野　操

懐徳堂の教授五井蘭洲は朱子学を信奉していたが、一方では早くから洋学の合理性・実証性に注目し、「紅毛国の人は俗にいふめのこ算用といふ仕方にて、理を以てして、目に見、器物を用ひてはかり、たしかなる事ならねば言いもせず用ひもせず、目を尊びて天をいはず、佛道を信ぜず、およそ怪異の事をうけとらず」といった。また安永二年（一七七三）には、後ちに兄竹山のあとをうけて懐徳堂学主となった中井履軒は『越俎弄筆』という本を書いて麻田剛立の解剖学を紹介し、また八年後の天明元年（一七八一）には油屋吉右ェ門摸製の顕微鏡を一見し、その構造について詳しく記載し且つ蠅、鼠の毛、山茶花の花粉、自分の鬚などの観察所見を書いた『顕微鏡記』を残している。これはわがくに最初の顕微鏡に関する文献である。懐徳堂の関係者のなかには儒者でさえ洋学に対しこれだけの認識をもち、自然科学への深い理解を示した人が出てきたのである。

こうした時点に於て、豊後杵築藩の麻田剛立は脱藩して大阪に移り住み（明和八年・一七七一）医業をしつつ漢訳の天文暦学書により西洋の天文学を知り且つ独自の實測によりケプラーの第三法則に到達した。二十年近くたち京都の大火で類焼した小石元俊は大阪に移り医業を開いた（天明八年・一七八八）。そして三年前江戸におもむき前野良沢、杉田玄白、大槻玄沢ら蘭学諸大家に直接親炙して得た知識にもとづいて上方に於て蘭方医学を首唱した。

この剛立・元俊の二人を蘭学者というのは厳密な意味では妥当でないかもしれない。しかしかれらが関西の蘭学界開発

に寄與した学勲は高く評價されねばならぬ。

大阪では、寛政期の前半（十八世紀の末）に橋本宗吉が出て、はじめてオランダ語を学修し、オランダの原書について西洋人の学問技芸乃至科学知識を直接学びとることができるようになった。それゆえに宗吉の出現を以て大阪の蘭学事はじめとするならば、江戸のそれよりも約二十年はおくれたことになる。それから緒方洪庵が幕府の召しに應じて大阪を離れた文久二年（一八六二）まで約七十年、これを一應大阪の蘭学時代と假定し、これに三時期を劃して考えるのがよいと思うのである。即ち

(1) 蘭学勃興期＝寛政期前半より文政末年まで

(2) 蘭学衰退期＝天保の初めより同後半まで

(3) 蘭学興隆期＝天保末期より以降

全期を通じて二、三十名の蘭学者乃至蘭方医を數えるが、その学統を一表に示すと次の通りである。（「大阪における蘭学々統一覧表」参照）

表でわかるように、大体は江戸派であり、殊に大槻玄沢の系列下に属するものが壓倒的に多い。次に長崎派としてはシーボルトの門人四名が大阪で医業を開いている。なお学統不明のものが十名ほどある。

また大阪では蘭学者といっても、橋本宗吉、緒方洪庵の両巨星を除けば、中天游・緒方郁蔵くらいのもので、江戸に比較すれば数に於てたいへん少なかった。

しかしかれらは蘭学摂取の心構えや態度に於て、また研究の方法に於て、江戸とは全く異質的な特徴を発揮した。そして洋学といえば即ち実学とさえされた時代に於て、研究のための研究に専念する学者すらいたのである。

また町人のなかにもいわゆる単なる異國趣味といったものだけでなく、西洋の技術や科学に対し深い理解を示したもの

大阪における蘭学々統一覧表

（氏名の下の実線は大阪以外の人
点線は一時大阪にも住んだことのある人を示す）

- 杉田玄白（江戸派）
  - 大槻玄沢
    - 宇田川玄真
      - 坪井信道
        - 緒方洪庵
        - 緒方郁蔵
        - 淡輪貞蔵
        - 小石中蔵
    - 橋本宗吉
      - 伏屋素狄
      - 大矢尚斎
      - 藤田顕蔵
      - 中川元吾
      - 大高元恭
      - 岡橋魯斎
      - 中川量平
    - 海上随鷗
      - 中天游
        - 緒方洪庵
        - 大庭雪斎
        - 中春塘
      - 春名一碧
      - 松本寛吾
      - 小森桃塢
        - 津田筑後（玄吾）
    - 中天游
    - 斎藤方策
      - 斎藤石城
    - 小石元瑞
      - 淡輪貞蔵
    - 沢周礼
  - 高一斎
  - 小石元俊
    - 斉藤方策
    - 中川元吾
    - 岡本尚卿
    - 小石元瑞
- （長崎派）
  - シーボルト
    - 高良斎
    - 日高涼台
    - 岡研介
    - 日野葛民
- （学統不明）
  - 野呂天然
    - 但馬天民
    - 明石天民
    - 山田金江
      - 島本良順
    - 宮崎欽平
    - 中宜平
      - 野田淳平
    - 松生正民
    - 但馬寿仙
- （西洋天学家）
  - 麻田剛立
    - 山片蟠桃
    - 高橋至時
    - 間重富
- （洋学庇護者）
  - 中井履軒
  - 木村ケンカ堂
    - 山片重芳
- （洋学推進の脇役）
  - 岩橋善兵衛
  - 服部吉右ヱ門
    - 中伊三郎

や、その財力によって集めた西洋の珍奇な器物、書籍、地図などを惜しみなく学者や医家に貸し与えて利用せしめたような洋学庇護者も二、三にとどまらなかった。

また洪庵の適塾が、京の新宮涼庭の順正書院、江戸の伊東玄朴の象先堂、佐倉の佐藤泰然の順天堂などとちがい、入門者を医師乃至医師志願の者に限定せず、兵学家あり本草家あり舎密家あり、福沢諭吉が「およそ当時蘭学を志す程の人は皆此の塾に入りて其支度をなす。」と言ったように志望の如何を問わず広く門戸を解放して入門せしめ、ついに長與専斎をして、「四方より来り学ぶもの常に百人を超え、四時の輪講絶ゆることなく、当時全國第一の蘭学塾なりき」と嘆賞せしめた洪庵と適塾の存在は天下の壮観というべきであったろう。

以上のような諸点で、大阪は洋学史上特殊な重要な地位を占めているのであって、それは大阪の洋学ならびに洋学界の性格からしても、また価値認識からしても、長崎の蘭学、江戸の蘭学には全く見られなかった異色あるものというべきであろう。

（大阪市）

一般講演

日本医学放射線技術史上の石田熊治郎について

今市　正義

石田熊治郎は、水木友次郎に次いで本邦におけるエックス線技術者の先覚である。石田が、明治三十年五月、仙台衛戍病院に勤め医療機具の修理を命ぜられ、三十五年五月、エックス線装置の操作に従った当時を回想し、医学放射線の草創時代における技術者の苦闘を述べようとする。

（高知県安芸市　森沢病院放射線科）

医学およびパラメディカル教育における制度史

――とくに日本における特長――

柴田　幸雄

すでに本学会において私は衛生検査技師および看護婦教育についての見解を報告してきた。

今回は医学教育を中心として、その制度史を考え、改革にあたっての私見をのべ、医科大学講座制のよりよき方向への進展にたいする話題提供を行ないたい。一、帝国大学令、明治十九年三月一日勅令第三号をもって帝国大学令が公布されたが、その精神的基盤は復古的大学論におかれ、他方その組織はドイツ大学制度に範をえている。今本令冒頭四ケ條を現在の学校教育法と比較し、大学のあり方にたいする価値観の異動について検討を加えた。二、医学・パラメディカル教育制度の発展と種類、現在の時点における医学・パラメディカル教育の制度を分けてみると、次の

四つがあげられる。①講座制大学　②学科制大学　③課程制大学　④各種学校　そしてこのなかで欠点があるとはいえ、もっともすぐれているのは講座制大学であることを強調したい。三、日本人の特性（神道的思考）と外国人の特性（キリスト教的思考）とのちがいとそれにもとずく大学制度の長所・短所、日本における大学制度の長所と短所を考えるとき、とくに日本における神道的思考（神佛習合思想をふくむ）とキリスト教的思考のちがいをみなければならず、またこれは戦後における家族制度の改革（戦前民法と戦後民法）、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの価値観について追及せねばならず、たとえ戦前の家族制度が法制上こわれたとはいえ、多くの家庭において厳然として生きている神道的ならびに佛教的慣習を考慮の外におくことはできない。このような広い意味における日本の思想史を考えていかない限り、ただ「古い制度をこわせ」ということのみでは制度の進展はみられず、ます〳〵混沌の度合いがましてくるであろう。これは最近おこった津市の地鎮祭の問題や、三重県の皇大神宮のPR、靖国神社法案の是非にも関連するものであり、医学部では解剖体慰霊の行事（主として佛教的）にも関係してくるものとおもわれる。（神道原論、谷省吾、皇学館大学出版部、昭和四十六年）

（同志社女子大学　家政栄養生理）

明治期学校衛生史の研究　九
学校身体検査制度

杉浦守邦

明治期の学校身体検査の発端は体操の効果判定の立場からであった。明治五年しかれた新学制下の教育は知育偏重に流れ、ために学生の不健康病弱化を招き、退学夭折するものが相次ぎ、これに対する反省から識者の間で体育重視の声があがった。それまで学制には名称があげられるだけで、実施の見送られていた体操法を研究する目的と、それを伝達する体操教師を養成する目的で、明治十一年十月東京一ツ橋に体操伝習所が開設された。この教師としてアメリカから招かれたのがジョージ・A・リーランド（一八五

〇―一九二四）である。ハーバート大学医学部卒業の医学士で当時臨床に従事中であったが、ハーバート入学前米国で最初に体操を必修科目とし、独立の体育館を設置していたアマースト大学の卒業生であり、かつ在学中体操クラブの主将として活躍した経験から推薦されたものである。したがって彼の伝えた体操は身体の健全、均斉な発育を合理的にすすめる意図のもとに創案された徒手体操を主とする医療体操、ないし矯正体操に類するものだった。これが長くわが国体操法の基準とされたことは興味深い。

したがって当然体操実施と平行して、効果判定の目的から身体計測が行なわれた。検査項目は体格および体力に関するものが主であって、体重・体長・臂囲（左右上下）・胸囲（充盈・空虚・常時）・指極・握力・力量・肺量・視力などであった。この検査を活力検査と呼び明治十三年以来その成績が発表されている。その後明治二十一年十二月文部省ではこれを直轄学校全部に拡大し、「学生生徒に体格検査の表式を定め毎年四月その活力を検査し翌月限り差出すべき旨訓令」して、翌二十二年以来実施させた。この統計は体操の効果判定の目的から、学年別集計の方法をとり年齢別集計でなかったから利用價値は少なかった。

明治二十二年の憲法の発布、明治二十三年の府県制・郡制など地方自治制度の整備によりわが国の近代国家体制が確立されるにともない、国の教育制度もようやく安定し、ここに再編整備の機運に向かった。それにともなって学校衛生制度もようやく国情に即して大綱を定める動きが生じた。その中心となって進めたのが三島通良（一八六六―一九二五）である。又彼の立てた方針を審議する機関として学校衛生顧問会議（三宅秀、緒方正規、小金井良精、弘田長、後藤新平、長谷川泰、エルウィン・ベルツ、豊住秀堅、小池正直）が設置されて、学校医制度・学校環境衛生制度・学校伝染病予防制度などが逐次定められていったが、身体検査についてもその日程にのぼった。その際従来の活力検査が体格と体力の検査にすぎなかった点を根本的に改め、わが国青少年期の発育状態を明らかにする人類学的目的と、学校環境ないし学校生活が児童を不健康ならしめている状況の早期把握の目的とから、明治三十年三月学生生

徒身体検査規程が制定公布された。このときは文部省直轄学校を対象としたが三年後には一部を改正し全公立学校にも適用されることとなった。

この規程では活力検査時代にあった体力関係の項目（握力・力量・肺活量）は全て削除され、新たに脊柱・体格・眼疾・聴力・耳疾・歯牙・疾病（腺病・栄養不良・貧血・脚気・肺結核・頭痛・衄血・神経衰弱・慢性疾患）の項目が加えられて、健康診断の性格が大巾に打出された。単位も従来の尺貫法をメートル法に改め、集計も年齢別とし国際的比較にもたえ得るようになった。このときをもってわが国の学校身体検査制度は一応完成したとみてよいと思う。

しかし当時は、学童の疾病異常の原因と考えられる学校環境学校生活の不備を、学校医の監視によって調節しようとの意図はあったが、これら疾病異常児に対して学校内で適切な処置をとろうとの構想はまだ生まれていなかった。日露戦争後の資本主義の発達により国民の就学率が急上昇したこと、又明治末全国的のトラホーム大流行に遭遇したこと、かつ第一次大戦後いわゆる大正デモクラシーの勃興と同時に児童愛護思想が盛んになったことなどの理由で、ここに有病者に対して学校内処置の採用が当然とされるようになり、大正九年身体検査規程の全面的改訂がなされた。同時に学校医の職務にも「病者・虚弱者・精神薄弱者の監督養護」と「異常者の継続監察」が課せられて、ここに大きな転換を迎える。このことは又従来学校衛生の目的が学校教育の及ぼす弊害の防止にあったのが、積極的に児童の健康の保持増進の方向に向かったのと軌を一にするものだった。

（山形大学教育学部　保健）

星野良悦の解屍

中山　沃

最近金指正三博士により「耳の垢」という広島藩の藩医進藤寿伯によって書かれた草稿が紹介された。寿伯の生年は不明であるが天保十六年六月藩主浅野齋粛の子定之丞（後の藩主慶熾）の係りの医師に起用され、弘化二年十二

月に御医師格を命ぜられ、七人扶持を支給された。寿伯の父三折と二代目星野良悦とは同じ御医師格で親しい間柄であった。この「耳之垢後篇、巻三、無題筆記之抜萃」の寛政三辛亥年の項に、

「四月六日雨天、雨天、海賊竹ヶ鼻ニ而討首獄門、張本貞六、兵次郎、同類丈吉、兵蔵、弥兵衛、栄蔵四人竹ヶ鼻ニ而討首、此節星野良悦、恵美三伯罪人死体壹人解体す、ほゝそ木と云所にて骨を蒸し取り木骨を拵へ候段大悪評」としるされている。

この日本で初めて木骨を製作した星野良悦が解屍をした年月日や場所等についてはこれまで不明であった。しかし右の短い記述で多くのことが判明した。すなわち寛政三年四月六日に広島城下の竹ヶ鼻（現広島市河原町付近）の刑場で処刑された罪人の死体を、恐らく舟で太田川を下り、一たん瀬戸内海に出て仁保島ほゝそ木（現仁保町柞木）に運び一体は解剖して内景を観察し、他の一体は蒸して骨格標本を作製した。良悦が死の一ヶ月前（享和二年二月）にしるした「身幹儀説序」に、

「範寧（良悦）、予め一場を設けて以て俟ち、其一を剖きて以て内景を察し、其一は則ち諸れを釜甑に上せて蒸熟すること一夜にして遂に臓腑を刳剝し特り骨骸を取り水に洗ひ日に曝し、聚めて以て連綴し、因て人骨の全狀を観て始めて天造の妙功に服せり。乃ち工人、原田孝次宣之なる者をして木を以て模刻せしめ、凡そ三百日にして成りぬ」と書いている。寛政三年四月六日から約三百日というと寛政四年の一月から二月にかけて木骨が完成したことになる。

この仁保島には当時革田小屋があったことが「耳の垢」の他の個所でしるされている。皮田は皮人に通ずるといわれ、仁保島の一村であったほゝそ木も皮革を扱った人々が住んでいたことが想像され、そのため骨格標本作製にこの地が選ばれたのであろう。良悦は前文にひきつゞき、「初め解剖の日、或る人杉田氏の訳する所の解体新書を贈りて比校に供せよと曰へり」とのべているが、これは解剖を共にやった恵美三白が解体新書を持参し贈ったのではないかと想像される。

（岡山大学医学部教授・生理学）

藤井方亭の生家について

茅原　弘

藤井方亭については、すでに故藤井亭己先生の御努力によりくわしく研究がなされ、これまでも何回かにわたり先生より発表がなされておりますが、三重県安芸郡豊里村野田の方亭の生家藤井新太郎氏宅を故亭己先生と共に訪問し、その節同家に残る方亭関係資料を写真にとりました。亭己先生がこれをくわしく発表される前に亡なられたので、これ等の資料を私がスライドで供覧します。

伊勢藤井家は八代周作保明の長男が方亭俊であります。方亭が家を出たため二男の保作が家をつぎ現在の新太郎氏に至って居ります。この間保作の養孫新吾は郡会議員等の公職につき現在の新太郎氏は豊里村教育長であります。

同家には系図二種の外数点の資料が残っております。スライドにてこの二種の系図の一部、宇田川玄真より方亭の父藤井周作にあてた請込状、藤井周作より玄真にあてた送り状、藤井家の諸願達し書扣(藤井周作のもの)、方亭のノート、過去帳等を供覧する。これ等によって当時の藤井家の背景を知ることが出来ます。

(津市)

七科約説と太田用成

土屋重朗

七科約説は一八七四(明治七)年五月刊行の米国ペンシルバニア大学教授 H. Harzhorne 著 A. Conspectus of the medical science の第二版の翻訳本である。訳者は當時浜松病院長兼附属医学校長太田用成と同医学校教官の柴田邵平と虎岩武で、浜松の鞍智逸平が印刷活版にあたり全国的に発賣された。この本は上編下編の二冊からなり、A5版・背革クロース全金文字入りの豪華な体裁の本で、浜松の印刷活版術の進歩していたことが分る。

最初明治十一年五月七科約説上編が出版され、つづいて翌十二年四月下編が出版され、同時に上編は訂正七科約説上編として再版された。總頁数は上下合せて二〇七六頁に

もおよび、解剖・生理・化学・薬物・内科・外科・産科の七科が訳述され、下編の最後にハ教授の memoranda medica の訳が附録として収載されている。

ハ教授やこの二冊の原書については、阿知波五郎氏の論著の中にくわしくのべられている。この訳書である七科約説は発賣と同時に非常な賣れ行きをしめした。これは多分に当時の医師制度に関係がある。明治十二年二月医師制度が発令されて、全国に医師試験が実施され、医術を開業するには特例をのぞき、この試験に合格しなければならなかった。その試験科目はほぼ七科約説に収載の科目と合致していた。七科約説はいわば医学生にとって格好の参考書であった。

当時わが国はドイツ医学を採用したといっても、それはまだ中央でのことであった。地方一般の医学は米英医師の影響もあり、また現状に合致した実際的で簡便な英米医学が広く行なわれていた。阿知波氏によると明治初期米国翻訳医書は五十二部にもたっしている。もちろん七科約説もその一つである。

訳者の代表者太田用成は一八四四（弘化元）年信州飯田の生れ、明治七年浜松病院の初代院長になったが、その医学と英語の学力は横浜で米人医師（シモンズ?）に学び、さらに江戸で医学所に学んでえたと推定される。遠州地方の医学の先覚者であり、またキリスト教信者でもあった。明治四十五年六九才で浜松で死去した。共訳者の一人虎岩武は太田用成と同郷の愛弟子であった。虎岩の英語の学力は抜群であったらしい。

（静岡県清水市）

佐伯理一郎（一八六二―一九五三）留学日記（米・独・墺・英）

阿知波　五郎

佐伯理一郎伝記については、未亡人佐伯よし子の編になる小伝が昨年（一九七一）出版された。演者は、氏の生前したしく交誼をうけ、その詳細にわたる留学日記、両親に送られた報告書簡集、及び全生涯の日記抄の閲覧を許され、これをメモし、複写しえた。今回さらに未亡人のご厚

意によって、その欠を補うことをえたので、前記小伝を補う意味もあって、留学日記をもととし、それを前記諸資料で補い、ここに報告する。次に、これらの資料からえた年譜を次に掲げる。

文久　二(一八六二)　一才、三月五日（新四、三）熊本県阿蘇郡宮地村に生誕。

明治　三(一八七〇)　九才、本島四郎に漢学を学ぶ。

明治一〇(一八七七)　一六才、二月一九日熊本城焼ける。四月二日豊後に退く。

明治一一(一八七八)　五月一日、一七才、県立熊本病院開院式。七月一四日熊本病院に奥山静粛を訪う。同病院医学校入学。

明治一二(一八七九)　七月コレラ流行。

明治一三(一八八〇)　八月一九日浜田玄達着任(教頭)。

明治一五(一八八二)　二一才、七月一日県立熊本病院医学校卒業、一一月一七日東京に遊学。

明治一六(一八八三)　二二才、二月一六日勝海舟、山岡鉄舟を訪問。四月七日北里柴三郎にドイツ語を学ぶ(有斐学舎)。一〇月一日蓋簪学舎に入り、ロスコー化学を学ぶ。

明治一七(一八八四)　二三才、二月杉田玄端の講義所に入る。内村鑑三最も勉む。二月一七日新島襄の説教を聴く。二七日独人ワルツに就く。三月一一日受洗。四月海軍軍医志願に決す。一九日東京病院開院式。五月一日東京病院医学校に入学。七月二日スクリッパの手術を受く。英学を始む。一〇月二四日任海軍々医補。

明治一八(一八八五)　二四才、一月三日熊本時代の恩師、浜田玄達、弘田長渡欧。六月四日ビヤソン同道。

明治一九(一八八六)　二五才、四月二六日東京海軍病院に転勤。七月一日慈恵病院の前身、共立病院に轉勤。七月八日成医会に入

会。七月九日ホイットニイの助言により米国留学に決す。九月七日少軍医　被仰付東京海軍病院附。九月二七日米国留学願提出。在官のまま許可。一〇月二九日拝謁。一〇月三〇日英国汽船「ヲシャニック」に乗船一一月一四日深夜桑港着。一一月二三日午後八時五〇分費府着。二六日ホイットニーの紹介せるウード、モリス両家を訪問。

明治二〇（一八八七）

二六才、一月三日ペ大学に通学。五月三日チエストナット三二六二、カムリー邸寄食。五月一四日ウード家に招せられて一泊。六月一四日費府を去り、紐育に赴く。七月六日アムホルスト大学に内村鑑三を訪う。九月二日ワシントン。九月五日第九回万国医学会。九月六日日本政府代表としてホワイト・ハウスに招かれ、大統領夫妻と二時間歓談。

明治二一（一八八八）

二七才、四月二日卒業試験開始。一九日終了（平均点数七三、八）五月九日ミュンヘン大学入学。五月二八日石黒忠悳来独。六月二日小池正直着。六月二〇日費府大学卒業証書到着。九月一日ミュンヘン大学婦人科教室に入局。九月二八日小池正直はわが心の友なりの紀事あり。一〇月一日親友小池ウイルツブルグに轉ず。一一日産科手術論の飜訳に着手。

明治二二（一八八九）

二八才、一月二七日ウイーン見学。三月六日ミュンヘンを去り、エナに轉学、細菌学（ゲルトネル）見学、産婦人科シュルツ教授に就く。六月一日ハレに轉学。七月一日ライプチッヒ見学。九月二八日ベルリンに轉

ず、西園寺公使、北里柴三郎を訪う。三月一日フランクフルト、次で三日フライブルグ着、ヘガール訪問。ヘガールの手術見学、荒木寅三郎と交る。三月一二日パリを経て、グラスゴーに赴く。四月一日田中館愛橘来訪。五月一日ロンドン着。一〇月二七日サア、スペンサー、ウェルスを訪う。

明治二三(一八九〇)　二九才、五月二二日エジレボロ訪問。一二月一二日「千代田」艦グライドバンクを去る。

明治二四(一八九一)　三〇才、四月一一日横須賀安着。

(京都市)

日仏医学交流に貢献した茂木蔵之助

古川　明

茂木蔵之助は明治一四年(一八八一)一月三日に、仙台市に生まれ、昭和二〇年(一九四五)二月二二日に、東京都で、六四才の生涯を閉じた。第二高等学校を経て、明治三八年(一九〇五)に、東京帝国大学医科大学を卒業し、外科学を専攻して、大正七年(一九一八)より、終生慶応義塾大学医学部教授の職にあった。

第一次世界大戦に際し、日本赤十字社は、赤十字条約により、英仏露の三国に救護班を送った。茂木は、仏国派遣救護班の医員として、塩田広重医長のもとに、大正三年一一月より同五年九月まで(一九一四―六)、多くの仏軍戦傷病兵の診療に従事し、フランス人の賞讃を得た。病院はパリのオテル・アストリアに開設され(一九一五年二月一四日―一九一六年七月一日)、班長以下班員約三〇名、収容

患者は定員一五〇名、全期間中の患者総数は九一〇名に達した。この救護班は、それまでのように、フランス医学を日本が受けるのでなく、日本医学をフランスに与えたという点で、特筆すべきであろう。

茂木は、フランスにおいての戦傷の治療、とくに二九四例の骨折の治療成績を報告するとともに、多くの経験より創傷の研究を進め、第二一回日本外科学会総会(大正八年)の宿題として、「創傷療法」を報告した。この研究の成果は、「創傷及び其の療法」(大正一四年)の単行本として残されている。また在仏中、パリで親しく交遊があり、多くの援助を得た、有名な外科医ドワイアン Engene Louis Doyen(一八五九—一九一六)が、救護班の帰国後間もない、大正五年一一月三〇日に逝去したとき、異国の親友を失なった塩田と茂木は悲嘆にくれ、ドワイアンの伝を報告して、日本の医界に紹介し、その霊を弔った。

第一次世界大戦が終ってから五年後、大正一二年(一九二三)に起っった関東大震災に際して、茂木は、フランス政府よりわが国に寄贈された「佛蘭西寄贈病院」の院長に選ばれた。この病院は、東京芝の高台、通称「有馬ガ原」に開設され、フランス陸軍の誇る天幕病院で、患者としておもに、虚弱児童を収容治療して、好成績をあげ、フランスの好意と期待にこたえた。

茂木の学位論文は「肺臓摘出の生体に及ぼす影響」で、また終生力を入れた研究テーマは「虫垂炎」であった。かれは、演者の師であり、現在仙台市連坊小路の保寿寺の墓地に埋葬されている。

(篠原病院　東京都)

ターヘルアナトミアについて(その一)

酒井　恒

いわゆるターヘル・アナトミアの翻訳(杉田玄白ら一七七四、大槻玄沢一八二六)により、西洋解剖学がわが国に

紹介されたことは小川鼎三氏の詳しい御研究により明らかである。演者は当時の西洋解剖学の知識と解体新書のそれを現代の知識と比較したいと考え、まずターヘル・アナトミアの翻訳を志し、本文の大要を知り得たので、今回はその総論とも言うべき第一篇〜第四篇につき報告する。

第一篇では解剖学の定義、対象、区分、教授法および目的と利用を、第二篇では人体体部の区分と各部の解説を、第三篇ではからだの基本的構成要素を肉眼的に有形要素と無形要素に分け、両者を更に細分してその定義を、第四篇では骨とその連結につき、骨の各部の名称と、関節を分類し、それを説明している。

解剖学はからだを人為的に切り分けることであると定義し、その対象は第一にヒト、次で動物であることを明記し、その教授には経験ある解剖学者の講義と解剖の示説と誠意ある明解な指導を必要とし、聴講者に不断の努力と細心な注意を要求し、著名解剖学者名を列記し、脚註にその略歴と著書を挙げている。解剖学の目的は造物主の叡智を知り、からだの自然な状態を調べ、病、死因を知ることであり、その利用により、からだと疾病との相互関係を知ることを述べている。体部の名称には現在の解剖学用語とその定義を異にするものがかなりみられる。体幹を体腔により頭、胸郭、腹に三分し、頸と肩を頭に、背を胸郭に含め骨盤は区別することなく腹に含めている。〔手の〕小指を耳をそうじする指として耳指と名づけているのは妙である。からだの構成要素のうち、神経は敏感で、これなしには運動が起こらないこと、血液が栄養を運ぶものであることを明記し、漿液、胆汁の味をも付記し、神経液（小川参照）にも触れている。臓腑をブドー状の腺と表現している。骨幹が最も早く硬化し、骨端軟骨により骨が成長し、骨の腔所は骨を軽くし、突出部は関節の構成にもあずかり、また脱臼を防ぐものであると。関節は詳しく分類され、からだの各種の運動のもとをなすことを述べている。十九世紀初めまでは、オランダ語に統一したつづり字法がなく、もっぱら発音に従ってつづられたものらしく、同一語で幾通りかの字つづりをもつものがあり、現代の辞書に見いだし得ない字つづりも多く、演者には本書の読解は相

当に困難であったので、杉田玄白らの苦心は察するに余りあるものがある。

解体新書と重訂解体新書を比較して

酒井シヅ
（金沢大学医学部解剖学第二講座）

解体新書の出版より後れること五十年、文政九年（一八二六）に出版された重訂解体新書を解体新書と比較し、解体新書で理解できなかった事柄がどのように訳されたか、或は訳語の面でどのように変化したかを比較検討し、次いで重訂解体新書と解体新書と構成上の違いを指摘する。そこで当時どんな参考文献を利用できたかも或る程度まで明らかにして、この約半世紀の進歩の状態をさぐってみた。

重訂解体新書は寛政十年（一七九八）の杉田玄白の凡例の追加と大槻玄沢の序文がある。玄白の文章から推察すると、この時、解体新書に相当する部分の改訳が完成し、玄沢は師の杉田玄白に見せたようである。ところが、考證好きの玄沢はそれから二十四年間をクルムスの脚註の翻訳、参考文献の調査にかけ、名義解を書き上げた。それで文政五年（一八二二）の建部清菴（二代目）の序文を首巻に載せ、文政九年（一八二六）に刊行している。

重訂解体新書の本文は全十三巻の内、首巻から四巻までの五冊、名義解が五巻から十巻までの六冊、十一、十二巻の二冊が附録となり、十一巻は中国医書に載る西洋医学関係記事を採録し、十二巻は玄沢の隨想となっている。

今回は解体新書に相等する部分に重点を置いて調べた結果を報告する。

解体新書で際立った誤訳個所はほぼ正しい訳となっている。ところが、簡単な誤訳で、そのままでも意味の通じたところで改めていないところも残る。

また、全く新しい概念で解体新書で相当苦労して訳したと思われる「眼目編」の光線の概念は、重訂解体新書でもまだ充分理解されていない。

このようなことを二、三、具体的に報告する。

（順天堂大・医史学）

西説内科撰要について

大滝紀雄

宇田川玄随の「西説内科撰要」がわが国最初の内科翻訳刊本であることは今さらのべるまでもない。演者は本書の考察と原著との比較をしてみたいと思う。

「西説内科撰要」十八巻は寛政四年（一七九二）玄随の自序、寛政五年桂川甫周、および多紀元簡の序文のある大阪書林版、演者蔵書を用いた。「増補重訂内科撰要」はやはり演者蔵の文政九年（一八二六）刊、十八巻（十三巻以降欠）江戸須原屋を用い、研医会図書館蔵同書十八巻、文政五年刊、風雲堂蔵版を参考とした。

原著は Gezuiverde Geneeskonst of kort Onderwys der Meeste Inwendige Ziekten; ten nutte van Chirurgyns. Amsterdam 1744 で Johannes de Gorter 著、研医会図書館所蔵の書をコピーさせていただき、同館蔵一七六一年版を参考とした。六一年版は四四年版に比較すると四一ページ増だが、七項目、五五篇の成り立ちは同じで、訂正はみられるが、著しい増補はみられない。「増補重訂内科撰要」の原著である一七七三年版は演者未見である。

「内科撰要」の翻訳完成が寛政四年とすると、本書は「解体新書」におくれること十八年、「医範提綱」に先んずること十三年という計算になる。片カナまじりの文章になっているとはいえ、文章はかなり難解で、静脈は血脈、膵の字もまだなく大キリイルと訳され、翻訳はかなり難航したように思われる。病名を例にとっても、ヲンゲダアントヘイト、シケウルボイク、シンキンゲン、イイグト、カウンプトレッキング等の適訳を見出し得ないで、漢字を適当にあてはめている。

「解体新書」と同じように本書はけっして純粋な翻訳でなく、分りにくい語に対しては説明や、それに対する引用書や、著者の意見をのべている。それらを細字で本文と区別しているが、説明だけで数ページに及ぶものもある。引用書としては「解体新書」のほか「東西病考」「遠西名物考」「医学宝函」「大槻玄沢の著ス所八刺精要」などがある。

宇田川玄真、藤井方亭により増補重訂が発刊されてからは、内容も一段と明確になり、読み易いものとなった。

（横浜市）

植学啓原における遺伝学

矢部一郎

宇田川榕菴（一七九八―一八四八）は『植学啓原』（一八三五）の巻之二に於て、「草木の変生」という章を設け、遺伝学的記述を行なっている。その内容はメンデル以前のものである事は言うまでもない。その内容を現代語訳にすると、〝ネギの花精は必ずネギの種子を発達させ、ニラの花精は必ずニラの種子のみを発達させるのであろうか。いや、そうではない。ネギの花精はニラの種子も発達させる事が出来る。この種子を播くと、生えて来る植物はネギでもニラでもない様な植物である。これを間種（雑種）という。野生の馬とロバとを交尾受精させれば、ラバが生まれて来る様なものである。即ち、ネギとニラ、野生馬とロバとは、元来、同じ属で、種が異なるだけなのである。牛と馬との間には、間種は出来ない。属が違うからである〟となる。

大体に於て、十八世紀の西欧生物学の知識を受容していると見られる『植学啓原』に於て、遺伝学的記述の源はケールロイター（一七三三―一八〇六）、ナイト（一七五九―一八三八）、あるいはゲルトナー（一七七二―一八五〇）の業績から探さねばなるまい。本書の生殖についての記述はケールロイター段階のものであるから、遺伝についても、その段階の知識が問題となろう。所で、前記の引用文から、榕菴は種間雑種についての説明をしている事がわかる。一方、ケールロイターは数多くの種間雑種を作っている。それ故、榕菴はケールロイター段階の知識を受容したものと考えられるが、その記述はケールロイターが問題にした事からは、ずれており、むしろ、リンネが分類学者として問題にした種や属の決定のための種間雑種の意義の方に、重心がかゝっている様に思われる。

（武蔵大・生物）

卯辰山養生所について

津田進三

安政二年津田淳三らが開設した私立の種痘所は、急速な発展をとげて文久二年藩営となり、元治元年には加賀藩種痘所となったが、「病院」を設置せんとの蘭方医たちの一致した熱望は遂に慶応三年十月加賀藩最初の西洋式病院として卯辰山養生所の開設をみるに至った。

救貧施薬を主目的として開設せられた卯辰山養生所は、治療が四民平等に行なわれたこと、戊辰越後戦争の負傷者を収容したこと、「医局」という概念が固定したこと及び医学館を附設して医学生を教育したことなど幾多の特徴が指摘せられるが、特にその建設が町民の拠金と労力奉仕により行なわれたこと、更に卯辰山一帯の開拓殖産という大事業が病院の維持費の拠出のために行なわれたことも注目すべき点と思われる。

卯辰山養正所を知る資料としては、「卯辰山開拓録」（明治二年刊）、「加賀藩資料、藩末篇」或いは金子治郎氏「母校の沿革」などがあるが、特に金沢町奉行の提出した「病院仕法書」（金沢市立図書館蔵）は建設計畫を詳細に述べている。即ち高燥広大な地をえらんで二間に四五十間の病人小屋二筋を建設し、板敷に一人宛の病牀をそなえた病室には病人百人を収容して、これに二十人の看病人を用意する。建設費は三百貫目を予定し、年間維持費の百貫目は各種の運上金で賄うことなどが計畫せられている。

ところで先般金沢大学医学部百年史編纂委員会の御好意により、「病院医院大略図」（十二枚）、「病院医院図リ書」、及び「卯辰山神社并養生所図リ書」（以上三点とも真柄要助氏蔵）をみることが出来たが、特に絵図面は最終決定に至る迄の計畫変更の過程を知らしめて興味深く、医学館部分を次第に縮少して病室に充てていく様子をよく知る事が出来る。

一方先年偶然入手しえた「病院丸散録」（内題は「卯辰山病院日用方」）は、丸散水油剤など二百二十五方を記したものであるが、当時の卯辰山養生所の治療の実際をうか

ゞわせて興味あるものと思われる。特に全身浴湯法として偽造海水浴などの五方を記してリウマチや皮膚病の適応としたり、或いは頭痛に人造氷の寒淹法を行ない、脱疽に強壮脚浴を行なうなど、内服外用以外の積極的治療法を行なっているのも注目すべきことと思われる。

この卯辰山養生所は明治三年金沢医学館の開設により貧病院となり、のち遂に医学館へ合併せられたのである。

（金沢市）

古代バビロニアに於ける医療について

鈴木哲哉

ヘロドトスはその著書「歴史」の最初の部分においてバビロニア医学にふれ、「バビロには医師がいない。病人がでると人々は彼を市場のような公共の場所に運んでいって寝せておく、すると傍を通る通行人はその病人に容態、症候などについて尋ね、その病気に適当と思われる忠告をする。そして何びとも彼の病気について質問することなしにその場を通り抜けることは許されないという習慣がある」と述べている。

この記述は一般にはヘロドトスの誤報として受け取られている。しかしヘロドトスがそのあとに書いた、たとえば当時のバビロニア婦人にはイシュタルの神殿において外国人の枕席に侍する悪習があったという話などは事実とされているし、さらにエジプトの章においてエジプトの医師が専門的に細分化されていることを伝えているのが、一九二七年にH・ユンカーによって報告されたギゼーの医師の墓に関する論文によってその事実が正確であると証明されたことなどを考えあわせても簡単には否定しえないのではないかと推測される。

古代バビロニアにはバルゥ、アシプゥ、アスゥという三種の医師がいたと説く者もあるが、彼らはいずれも神官ないしは占師、呪師であったことに間違いないから、彼らの仕事は医療が専門ではなくむしろ片手間であったと想像され、「バビロニアに医師がいない」というヘロドトスの判断は正しいものだとしてよい。フランス人のR・ラバトは

医学関係の粘土板を解讀してこれを「アッカド医学における診断と予後」なる書物にまとめている。

ラバトの書物の資料となったのは四〇枚で一組になっていたと思われるタブレットの群だが、そのうち一七枚は破損がはげしく、残る二三枚が飜訳されている。

書物の内容は病人の周囲におこるあらゆる現象、たとえば鳥の飛び方、サソリや蛇の動き、病人の表情などをもとにしてその病気の原因や予後を判定しているものだが、市場において病人のために通行人が提供しえた情報もおそらくこのようなものであったのではなかろうか。病気の原因には神の名がもっとも多く語られ〝神の手〟にうたれ、とらえられ、触れられたためとするものが多く、イシュタルや太陽神シャマシュの名がもっとも多くあらわれる。デモンについての記述はこれに比し少なく、それもエテンミ（妖怪）なる一般名がもっとも多く、固有名ではクビュがこれについでいる。今回はトンプソンやエベリングの文献を参考としてバビロニア神医学ないし呪医学について概要を述べる。

（実中研・医学研究所）

古代印度医学と仏教医学との比較（I）

石原　明
杉田暉道

印度の伝統医学を代表するアーユル・ヴェーダは、印度の医史のきわめて早い時期におこったと考えられる。これは、総説篇（四六章）、病理篇（一六章）、身体篇（一〇章）、治療篇（四〇章）、毒物篇（八章）および補遺篇よりなっている。補遺篇は六六章よりなり、はじめの二六章は特殊外科に属するもの、次の一二章は小児科に属するもの、次の二一章は治療篇でもれたものを収めたもの、次の三章は鬼神病を述べたもの、最後の四章は本篇を装飾している。仏教医学は、厳密にいうと仏典に述べられている医学を指す。この医学の内容が、どの程度まで仏教思想に影響されるかは大いに議論のあるところである。今回は摩河僧祇律に述べられているものと、アーユル・ヴェーダとの比較を検討したい。

（横浜市大医学部）

日本先史時代の暦法

——月名の解明と生産呪術の考察を中心として——

三輪卓爾

計数・測定は人類文化の発達に不可欠の要素である。基本数の算定、空間的距離・時間の測定などはその代表的なものといえよう。

基本数については人体部分中とくに手指の役割が大きく、また空間的距離（長さ）の測定にも人体構造が基本的な役割を持ったことは、上代日本語の「ひろ」、中国語の「寸・尺・丈」、英語の“foot”などの例が教えるところである。

いっぽう時法・暦法について見れば、リズムをもった人体機能が密接な関連を持ったことが推定される。人体活動のリズムとして、心搏・呼吸などは短かく、世代（generation）——本来「産児」・「生殖」の意——などは長く、月経周期・妊娠期間などはその中間に当ろう。こうした事情から概括的な比喩を試みるならば、長さの尺度は〈解剖学的〉であり、時間の規準は〈生理学的〉といえるかもしれない。

各古代文明の暦法は由来・形式を異にする面も多いが、上記のような共通な基盤を持つように思われる。また反面、バビロニアで月の第七、一四、二一、二八日を不吉として商取引をさけた慣習が、ユダア・キリスト・イスラム各教の文明にひきつがれ、暦法の一部として社会生活にリズムを与え、肉体・精神衛生上の役割を演じたという、Sigerist が指摘したような医史学的事実も、興味深い。

天体・地象の動きや、動植物の繁栄・死滅は、人体そのものの神秘とともに、古代を生きた人間にとって、幸不幸を左右する切実な関心事であり、しかもその中のどれをとっても、予知し支配できる程度は現在よりもいっそう少なかった。これらの要素の一つが自分たちの意に任せぬとき、古代人はそれを他の要素に関連させて、さまざまな呪術を生みだしたのだと考えられよう。

日本固有の月名として「むつき・きさらぎ」にはじまる

ものは、古来その由来が不明で、個別的にあい異る原理によって種々な説明が加えられてきた。ここでは上記のような背景を考慮しながら、日本古来の月名を、大和言葉の数詞にもとずいて解明できないか、という試論を提出してみたいと思う。

（東京女子医大消化器病早期ガンセンター）

奈良時代庶民の人口ピラミッドおよび死亡

日野英子

正倉院文庫には大宝二年（A・D・七〇二）御野国味蜂間郡（安八郡）春部里戸籍をはじめとして諸国の戸籍の残簡がみられ、また諸国計帳にも戸籍が残っている。これらのうち記述に欠除がなく戸の構成の記載の完全なもの二三〇戸から、性、年令別、地方別に人口ピラミッドを描き、奈良時代一般庶民人口構成について考察した。戸籍は美濃（御野）、西海道（豊前、豊後、筑前）、下総の三地方と、神亀～天平（A・D・七二四～七四八）のあいだの諸国の計帳分との四群にわけられる。これらの戸の平均人口は一、四二三人、男六七、女七五で最も多いものは一二四、最も小さい戸は二であった。

一九七〇年全国人口で描いたピラミッドに比べると、計帳によるものが似た形状を呈し、御野、西海道のものは正常の形に近い。これより二〇年遅れた記録である下総の戸籍と、御野、西海道の二〇才台の性比を求めて比較すると計帳を除いてはいづれも女の乳幼児が男より少い。また乳幼児人口が、その他の人口に比べて少いことはこのころ小児の間に全国的な伝染病流行があったのであろうか？またこの性比の様子は各地とも四〇才台まで続くものが多く、地方の女子人口の中心への流出が考えられる。

文書にはまた各地の正税帳が残っているがこれらの正税帳には税の出納が詳細に記述されている。すなわち、各年度の国別正税、その内訳、品目、使途別用量、出挙穎稲、穀稲量、利稲、またこれらの保存庫の収納状態などである。これらの記述のうち出挙稲は諸国の人口を基準として

その量が規定されたと考えられている。従って当時の庶民人口算出の基礎資料として取上げうる材料であり、かつその記載のうち、当概年度の死亡による免稲が実数をもって明らかにされている。したがってこれらの数値から当時の庶民人口の概数を算出することは可能であり、正税帳の残簡から得られた死亡数から各地方の死亡の割合を窺うことができる。このようにして得た死亡の割合から、A・D・七二九～七三七の間の九年間の様相を眺めることが出来た。

（防衛大学校体育学教室）

「医学天正記」の研究（第二報）

矢　数　道　明

第一報では、「医学天正記」の成立と、その異本の数々を紹介、玄朔が、後陽成天皇に灸治を行なった年月日について「天正記」（以下天正記と略称）の記録と「今大路家記鈔」を引用し、従来の諸説を検討是正した。

第二報では、従来行われていた玄朔略伝中に玄朔が壬辰朝鮮の役に従軍し、毛利輝元の治療を行なったことはあまり記録されていない。

玄朔は従軍中に「山居四要抜萃」という養生書を日本史に改めまとめたという。これらのことにつき「天正記」を基確としてのその史実を紹介してみたいと思う。

「天正記」泄瀉門の冒頭に、

「天正十五年の春、毛利右馬頭、輝元、齢三十五才、秀吉から島津征伐の命をうけ豊前小倉に在ったとき、宿痾の下利と下血で苦しみ、心下も堅くしこり、脚がはれて歩行もできなくなった。玄朔は秀吉の命によって小倉に赴き治療に当ったところ、十数日で快方に向い、馬に乗って豊後を経て日向に進んだ。玄朔は輝元につき添って治療を続けながらこれに従い遂に全治させた。」という詳しい記録がある。

玄朔は「天正記」の中で只一語ではあるが、朝鮮より帰ったということを語っている。それは「下血門」のところで、会津宰相蒲生氏郷が征韓の役の折秀吉が采配を振った肥前の名護屋に在って、下血を患っていた。そのとき「自分は朝鮮より帰って上洛せねばならぬため忙しいので診察

しなかった」という簡単なことばである。しかしその後の氏郷の病状治療の経過が詳述されていて、その記録によると、玄朔が帰國したのは文禄三年に当るようである。

玄朔の朝鮮出征については三木栄著「朝鮮医学史」(三二三頁)に詳しく述べられている。即ち「山居四要抜萃」のところに「文禄元年、毛利輝元で朝鮮開寧県に在ったとき沈痾に悩んでいた。秀吉の命により千里を遠しとせず、玄朔は朝鮮に渡り治療して治った。玄朔が密陽県で〈山居四要〉を手に入れて、これを日本文に改めて一書を作った」と詳記されている。思うにこのときの輝元の病は沈痾とあるから天正十五年のときと同じく下痢下血であったらしい。嘗て下痢下血を玄朔が治したので、秀吉は再び玄朔に命じて朝鮮の輝元のところへ遣したのであろう。

中外医事新報(昭和三〜五年)に「今大路家記鈔」が連載されているが、これを読むと曲直瀬家と毛利家、宮廷や将軍家、諸大名との関係などにつき興味あるいろいろの記録がある。その二、三を紹介してみたい。

(東京医大・薬理)

戦国武将の医学意識と医道伝授

宮本義己

乱世に武事を糧として生き抜いた戦国武将が、合戦の間隙に武事の鍛練の外、歌道・茶道・舞踊などの諸芸道にも執心した様子は、周く知られるところであり、語るに及ばぬ通事であろう。それだから、この方面での研究はかなり盛んであり、枚挙に遑のない程数多くの研究業績がある。こうしたなかで、戦国武将の性格を医学的見地から究明しようとする試みが、漸次進められてきている。近時刊行成った服部敏良氏の『室町安土桃山時代医学史の研究』など、その好例であろう。氏は、『奈良時代医学の研究』を端緒として、日本医学を各時代ごとの詳細な研究に纏められてきた。『室町安土桃山時代医学史の研究』では、根本史料である日記文献の駆使により、当該時代の衣・食・住生活及び医・薬発達状況の精密な考察を試みる一面、「織田信長の性格論」などで、戦国武将の行動原理を新たに医

学的立場から再検討を試みている点、これまでの研究にはとんど類例を見ない。尤も、すでに王丸勇氏の論稿「上杉謙信の不犯と大酒」・「武田信玄の謀略と死因」（日本医事新報昭和四五年三～四月）がある。が氏が同書の自序で「むしろ医学的に究明することによって、従来、専門史家によって気付かれなかった点を解明する何等かの手がかりを提供することが出来るかも知れない」と述べられているように、医学的考証の応用という意味で、十分評価されねばなるまい。

ところで、当該時代、つまり戦国・統一期に於いては、武士の心得としての医療知識（殊に金創医術）は、体力保持・戦傷療治のために、現実的かつ即実性を有する素養として、平生以上に必要とされ、重要視されたであろう。したがってこの意味に於いて戦国武将の医学意識・知識はむしろ一般的通念と考えて差し支えあるまい。そしてさらに、これの具体化された戦国武将の医道伝授は、より高められた彼らの学術的素養の一端として考えることができよう。

そこでこゝでは、先学の研究を考慮しながらも、さらに見方を変えて、これらの問題、つまり戦国武将の医学意識及び医道伝授について、新史料も加味することにより、個々の実例をあげて考証しようとするものである。

（国学院大学研究室史学第3）

禅宗僧の延寿堂について

関根正雄

「延寿堂」とは、禅宗門にみられた病僧に対する寺院内の収容施設である。中国の唐代に、禅宗の寺院規矩が、百丈懐海によって整備されたときには、既にこの施設は確立されている。本邦では、鎌倉時代に禅宗門が入ってきて定着し、多数の雲水の在宿した寺院のいくつかには、現在もその遺構や遺跡が残っている。

元来、仏教では病者とは、四大増減して諸々の苦をうけることであり、四大和合の調和をみだす原因は、「妄」の存在をもつとされる。従って病苦を療養する延寿堂は、寺院にあってひとつの修道場であるということができる。延

寿堂に仏像や仏具を装置するのは、この理由による。

永平道元の「知事清規」や無著道忠の「禪林象器箋」などには、延寿堂に関するいくつかの記述があり、その施設の意図が明確にされている。しかし、延寿堂を設置することは必須条件ではなかったもののようで、「黄檗清規」には、それを設けることを特に力説しているし、諸清規のうちには、その記述を欠いているものもある。

仏教の原初集団には、大衆のために「福徳堂」が設けられたとされ、衆僧のためには「療養堂」があったようである。延寿堂創設の発想が、修道僧の間の友情を源泉とするならば、当然、後者にかかわりをもつ。また、病僧に対する修道の場の意味ならば、延寿堂には、涅般堂・省行堂・無常堂・安楽堂などという別の名称のあったことが、その裏付けとなる。

（群馬県太田市）

徳島県における漢方医存續運動について

福島義一

明治新政府が西洋医学採用を決定した結果、明治八年（一八七五）実施の医術開業試験は全科目西洋医学で行はれ、明治一二年（一八七九）公布医師試験規則によって、全國統一して西洋医学各科試験が行はれるようになった。当時わが國開業医の大部分を占めていた漢方医にとって、特例として終生その特權が認められたとは言へ、その前途は誠に暗たんたるものであった。こゝに於て、漢方医は浅田宗伯を中心として温知社を結成し、全國的に団結し、西洋医学偏重の新医制に対して激しい抵抗を試みて、漢方医学と漢方医との存續をはかった。この運動を徳島県についてみると、その中心人物は井上肇堂〔ちようどう〕（一八〇四―一八八一）で、筒井珉岱、寺沢道榮、近藤康斎、馬島春榮（何れも元藩医）等が彼をたすけた。

井上肇堂は徳島県板野郡板野町矢武の人で、一般方漢医学の他、外科を紀州の華岡青洲、産科を京都の奥劣斎について学んだ。藩制時代には、その医術の優行の菲凡によって藩医にあげられたが、廃藩置県後は医制につくし、その晩年はもっぱら漢方医の存續運動に全力を捧げた。その子孫井上家（徳島市幸町三丁目）には「井上家規」の他、漢方存續に関する嘆願書、陳情書、建白書など肇堂自筆草稿が多数所藏せられていることが判った。

演者は、是等の史料に據って、徳島県下に展開された明治前期の漢方医学および漢方医の存續運動の概要を発表する。

（徳島市）

旧約聖書時代の衛生状態

小沢吉見

旧約聖書はヨーロッパ文化の基礎を形成し、正經として、今日まで大きな力をもっている。旧約聖書を宗教文化史、歴史的記録として、また芸術上の価値からの研究は沢山に見られる。

しかし、この聖書が律法を中心としており、神の絶対命令であると同時に、イスラエル人の守るべき日常生活上の道徳、マナーとして彼らを律して来たことを考えると、この律法中に具体的に物語られている事項は彼らの生活意識、生活状態の記録と見ることが出来る。

最近の考古学上の発掘により、これら記録の実証的研究も進められている。

市街跡の発掘により排水溝の配置状況、各家庭の廃棄物の処理状況が示された。それは人々の健康、死亡、幼児の犠牲の問題解明に手がかりを与える。

身体の洗浄、テーブル・マナー、衣服の洗濯という日常生活の規則は祭事という特定目的以上に一般のイスラエル人に大きな関心事であった。

食器道具類の種類、その保存方法も発掘による成果と聖書の記録と比較検討される。

聖、清潔を求める神の絶対命令を日常生活の上に実現す

るための彼らの努力、そのために尊重された香料の問題が注目される。

香料の種類、製法、使用目的、さらにその経済上の価値から来るキャラバン・ルートの問題と関連して行く。

発掘された個人の家の施設からも香料の使用状況は明らかにされる。

神の絶対命令という形をとりながら、彼らの慣習を定型化し、固定し、タブーとして強制力を持たせることにより民族全体の衛生状況を改善し、社会秩序を保持することに成功した。

エジプトにも、ギリシアのポリスにも見られない、この行きとどいた、具体的な生活規範はイスラエルの国の運命とは無関係に、時代を超えて彼らの生命力維持に大きく貢献して来たのである。

（名古屋保険衛生大学）

泰西医学と数学

大矢全節

ギリシャ医療数学々派の学者たちは、天文学的計測から得た数値で病気の予後を知り、水時計を用いて脈搏および発熱の時間を計測し、数学を医療に導入していた。その代表者は Herophile であった。アレキサンドリアにおける時計作りの伝統はビザンチンによって引き継がれていた。Avicenne 以来、アラビア医学は天文学、錬金術と結び付いて発達した。

アラビア医学の遺産は中世医療数学々派の学者たちによって保存され、フランス国王シャルルV世の侍医 Christine de Pisan は医学者であると同時に哲学者と幾何学者とを兼ねていた。Léonard de Vinci もこの方面に貢献した。

XVII 世紀の頃、William Harvey, Santoro Santorius の業績は数学と無縁ではなかった。

死亡率、出生率について統計に先鞭をつけた William Petty がいた。Sydenham は阿片の用量に数値を規定した。

XVIII 世紀になって Deventer, Smellie などの骨盤径の測定は Baudeloque によって一層完全なものとなった。

Riva-Rocci および Marey はそれぞれ器械を用いて血圧測定する方法を発表した。

Vierordt によって始められた血球の計算は Malassez および Hayem によって臨床に利用されるに至った。

代謝の数値的の考え方は J. von Liebig によって、生物化学の研究の端緒となった。

Cl. Bernard, Gavarret および Paul Broca たちも、夫々の分野での研究に数値を輕視しなかった。

以上数学の知識は医学の研究に必須なものであることを示している。

下等生物の卵は一週間で、魚類のそれは大体二週間で、鶏の卵は三週間で孵化し、人間は四週間目に排卵する。

ラッキー、セブンの神秘は未だ遠い彼方にある。

（京都市）

健保採用

神経疾患・心臓疾患などに
すぐれた治療効果を
発揮する

■活性持続型ビタミン

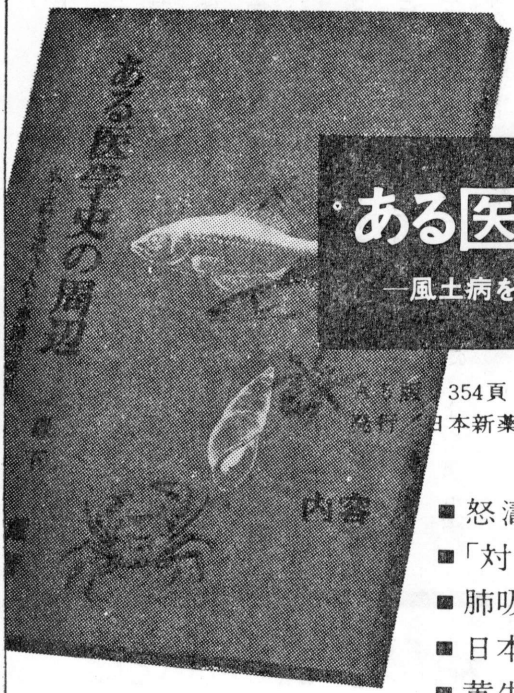
アリナミンF®
ALINAMIN-F
「タケダ」

錠剤	25mg	注射液	10ml	25mg
	50mg		20ml	50mg
			20ml	100mg

武田薬品工業株式会社
大阪市東区道修町2丁目27番地

(ALA-52-2)

＊新刊書案内



阪大名誉教授
森下　薫　著

ある医学史の周辺

—風土病を追う人と事蹟の発掘—

A5版／354頁　定価／1,000円（送料140円）
発行／日本新薬株式会社

- 怒濤の中の奇病を追う人
- 「対葉館」二階座敷の研究室
- 肺吸虫の秘密をあばく
- 日本に於ける肝吸虫の発見
- 黄牛病の謎
- アクラの野口博士
- ロスのマラリア研究を偲ぶ
- ズビニの鉤虫発見の跡
- 杉山なか女の解剖願書
- ジョセフ・メイステルの生涯
- 日本寄生虫学の夜明けと
  ベルツ博士など16編集録

☞ **ご購入方法**／一般書店及び医学専門書店へお申し込み下さい。
直送ご希望の方は送料を添えて下記へご送金下さい。

〈162〉東京都新宿区市ケ谷佐土原町２の１　保健会館内　予防医学事業中央会
（振替　東京38038）

〈550〉大阪市西区北堀江通５の59　大阪予防医学協会　（振替　大阪64926）

〈601〉京都市南区西大路八条下ル　日本新薬株式会社　（振替　京都3231）

評伝

頼山陽の病志（二）

富士川　英郎

文化六年十二月二十九日、山陽は備後国神辺の菅茶山に迎えられて、その廉熟の都講となった。廃嫡されたうえ、独りでは藩内の田舎へ出かけることも許されないという拘束のうちにあって、かなり荒んだ遊蕩生活に耽っていた当時の山陽にとって、この神辺行きは、なによりもまず従来のそうした息苦しい生活環境からの脱出を意味していたのであり、これによって山陽の生涯に新しい局面がひらかれたことは、疑いのないところである。だが、かねてから三都のような大処に出て、「当世の才俊と被呼候者共と勝負を決し申し度く」という宿志をいだいていた山陽には、この神辺の田舎での生活の無聊と退屈が堪え難かったばかりでなく、さらに茶山から福山藩に仕えることや、妻帯することなどをすすめられるに及んで、山陽がそれらに反撥するかのように、たちまち神辺を跳びだして、京都へ高飛びしたことは、周知のところだろう。

そんなわけで山陽が神辺の茶山のもとに寄寓していた一年あまりの短い期間は、落着きのない日々があわただしく過ぎ去っていったといってもいいありさまであったが、この短い期間にも山陽はときどき病気に罹ったらしい。例えば文化七年七月二十六日附で彼が広島の築山捧盈にあてた手紙のうちにも、「当所へ参候てより、下地の病気増々重り、食事等大に減少仕、肉脱仕候様に御座候て、ぶらぶら仕居申候」[27]という一節があるが、この病気はやはり同じ頃に梅颸が茶山夫妻に寄せた手紙（文化七年八月十一日）のなかで、「久太郎事も、夏がたは痢の様に御座候由、誠に当分の事にて、早速快相成候由、とかく病身ものにて、あなた様方に御世話かけまゐらせ候と存まゐらせ候」[28]と言っているのと同じ病気だったろう。これは大腸カタルのようなものであったかと思われるが、山陽がこれを「下地の病気」と言っているところから、これまた彼の一種の持病のようなものになっていたことが推察されるのである。なお茶山の日記によると、山陽は明けて文化八年の正月七日にも病臥して、医師の診察をうけているが、これは軽い風邪であったらしい。

山陽が神辺を去って、京都へ出たのは文化八年、彼が三十二歳になった年のことであった。それ以来、天保三年に五十三歳で死ぬまでの二十一年間は、彼の後半生というべく、その宿望がかなって、官羈されない自由な境遇のなかで、彼が儒者、または文人として存分に活躍した時代である。いわばこれは山陽の真面目が発揮された時期であったと言ってもよく、この間に彼の文名が四方にとどろいたことは周知の通りである。

ところで、この後半生における山陽の健康状態について見るならば、この時期の彼は、最後の数年間を除いて、概して壮健であったと言うことができるだろう。第一に少年時代の彼を悩ました鬱病の発作は、この時期にはすでに完全と言っていいぐらいに影をひそめてしまっている。少くとも、それは人目に目だつほどの現われ方をしていないのである。それからその他の病気も、これは元来が虚弱な彼のことであるから、風邪とか、腹下しとか、ちょっと

した違和は絶えることがなかったらしいが、しかし、とりたてて言うべきほどのものはなかったようである。文化十四年十月二十四日附で、山陽が橋本元吉にあてた手紙のうちに、「當夏は、僕も已に上鬼籙二所なりし。疫症□□、下地之病にフクリンカケ、甚困入申候」[29]と言ってあって、これによればこの年の夏に山陽は疫症（大腸カタル？）の重いのに罹ったように思われるが、それがはたして彼の言っているほどの重患であったかどうかは疑わしい。いずれにしても梅颸にはこの病気について何も報らせなかったらしく、彼女の日記にはそれについてなにも記載されていない。もっともこの時期には山陽は梅颸と離れて、京都で生活していたのであり、その当然の結果として、梅颸の日記に山陽の健康状態のことがこまごまと記されることがなくなっており、そのせいで、彼がこの時期にあまり病気をしていないように見えるのかもしれない。だが、たとえこのことを顧慮してみても、その後半生の二十年間、山陽は概して壮健であったばかりでなく、この時期に彼はおそらくはその生涯において最もその健康を楽しむことができたのではないだろうか。彼はこの時期に九州を一周しているほか、京都と広島の間を十一回も往復しているのである。それは平均して二年に一度、往復したということになるが、これはやはり健康でなければできないことであったろう。殊に文政元年二月、父春水の三回忌の法事をすませたときは、まるでそれまでの彼の頭上になにかしら重たく蔽いかぶさっていたものがすっかり掃いのけられてしまったかのように、山陽は身も軽く、そのままただちに九州への旅に出かけているのであるが、このほぼ一年間に及んだ九州旅行中、彼は非常に元気で、その旅先きから梅颸にあてた手紙のなかでもくりかえし、「私は至極達者、酒も大分上り申候」[30]（文政元年四月二十一日附、赤間ケ関より）とか、「私義、旅が藥に相成候か、大に元気に有之、中〳〵病気は出不ㇾ申候間、御案被ㇾ下まじく候」[31]（五月二十五日附、長崎より）とか、「何分至極達者に御座候間、決て御案被ㇾ下まじく……」[32]（七月八日附、長崎より）とか、「至極達者に而、少も屈不ㇾ申候、乍ㇾ懼御安心可ㇾ被ㇾ下候」[33]（十月六日附、熊本より）というように、その健在であることを報じているのである。

だが、やがて文政七年、山陽が四十五歳になった年あたりから、また彼の健康状態に或る異変が生じてきたように思われる。殊に目だつのは、この年以後、山陽がしばしば風邪に罹って、病臥していることである。文政七年三月、山陽は上洛した梅颸を迎えて、ともに京阪の諸所に遊んだが、『梅颸日記』には、三月二十二日に、「久太郎、風気、酒食、味なきよし云」[34]とあり、この風邪は二十六日（「久太郎、ととあげ）頃までつづいたらしい。ついで文政八年十一月二十三月附で山陽が鳩居堂にあてた手紙のうちに、「不快は、先よろしく候へども、さっぱりと致不ㇾ申候」[35]という言葉があり、これは風邪であったかどうか判然としないが、翌文政九年三月三十日附で茶山にあてた手紙のうちには、「私ども旧臘より風邪未二全解一、困居申候」[36]とあって、その前年、つまり文政八年の暮からの風邪がなかなか治らないと言っている。さらに文政十一年の十月にも山陽は風邪に罹ったらしいが（十月中の後藤松蔭宛の手紙に「先日來風邪にて……」とある）、やがて彼の命を奪うことになった肺結核と関連して注目すべきは、天保元年以降に現われた執拗な風邪である。

天保元年は文政十三年に当り、山陽はすでに五十一歳になって

いたが、この年の六月、梅颸が病臥したという報らせをうけて、彼はただちに京都を発って、広島へ向った。だが、六月二十二日に広島に着いてみると、梅颸の病気はさほどのこともなく、一安心というところであったが、二十九日には却って山陽自身が風邪に罹って、病臥してしまったのである。しかもこのたびの風邪はなかなかぬけず、山陽を悩ませたが、まず、『梅颸日記』についてそのときの様子を見れば、次の通りである。

「(六月)二十九日、晴。久太郎、風邪、昨夜の事也……。
(七月)五日、晴。久太郎、月代少々、再寒の気味と云。
七日　晴。……久太郎、同事、邪気サッパリセズ。
十日　陰。……久太郎、風気ぬけず、(中村)元亮見廻、薬三貼調合、今晩、汗とれと云。昨今酒止。
十一日　晴。……元亮見廻、久太郎診察、三貼薬調合。
十二日　雨。……久太郎、同様。
十四日　陰。……元亮見廻、久太郎薬調合。
十五日　晴。……久太郎、九日より酒止。今日少用る」[37]。

七月二十八日、山陽は広島を発って、八月六日に京都に帰ったが、その風邪は依然として治りきってはいなかったらしい。翌七日に彼が梅颸にあてた手紙のなかに、「私風邪難レ抜、一旦難義仕候へども服薬候[38]」という言葉があり、十一日附の同じく梅颸宛の手紙では、「私途中より病も追々よろしく、幸、生体に相成候、千万御安意可レ被三遊下一候[39]」と言っているけれども、これは梅颸にあまり心配をさせまいとする配慮からでた言葉であったのだろう。実際には九月に入っても山陽の風邪はまだはっきりしなかったようで、それはその頃彼が諸友にあてた手紙のうちに、「私又獲三疫及痢疾二[40]」(九月八日附、藤村澹斎宛)とか、「風邪にて臥床中走筆、御察讀被下候様願上候[41]」(九月二十四日附、森山団右衛門宛)とか、「僕亦得レ疾、散々に候へども、浩気は依然[42]」(十月十一日附、服部竹塢宛)といったような言葉が散見することによっても知られるのである。このときの山陽はまさしく彼が坂上桐陰にあてた手紙のうちで、「今年は誠に悪事打続、僕、母(の)病を省候て、自己患レ疫、己癒上三帰路一候路より患レ痢……[43]」(八月十八日附)と言っているような状態であったに違いない。

ところで、この年の山陽の病気ははたして何だったのだろうか。梅颸も、山陽自身も、これを風邪と言い、山陽はまた疫及び痢疾とも言っていて、下痢の症状が伴ったことを示しているが、それが永引いて、いつまでも全快しなかったことや、やがてこの二年後に山陽が喀血していることなどから推察すれば、この病気はおそらくすでに結核性のものであったのではなかろうか。いずれにしても山陽の健康状態は翌天保二年になっても一向に晴ればれとしなかったらしく、この年の二月十六日に藤井雪堂にあてた手紙のうちに、「昨日は梅、阿漕に御所望仕候處、望外の一枝大者被レ下……病牀の大娯不レ過レ之候[44]」とあって、その頃山陽が病床についていたことが知られるのである。もっともその数日後の二月二十三日に山陽は浦上春琴、小石元瑞、小田百谷らとともに、大和国月ケ瀬の梅林を見物しているし、その後もしばらくはかなり元気をとりもどしていたようにも見える。そして八月九日には梅颸に向って、「……とんと小石などの薬、三年も五年も、もらひ不レ申、風引候へば、木(生)薬や、葛根湯にて済セ申候、御安心可レ被レ下候[45]」と気焔をあげているが、医師の小石元瑞の薬などは「三年も五年も、もらひ不レ申」というのは、たぶん梅颸を心配させまいとする誇張の言であって、実際にはこの頃すでに山陽

は小石の処方による薬を服用していたのである。彼は九月七日附の小石宛の手紙のなかでこう言っている。「此間は、御考の御薬、不レ懈服用仕居候。薬効と相見、小便は頗得二通利一、快通と申程には無之候へ共、従前とは大違に候。其わりには熱さばけ不レ申候歟。併、咳嗽は少き方に相成候」[46]。

これによれば山陽はその頃、小便がよく通じなかったほか、熱もあり、咳もでていたようである。従ってこの年（天保二年）の九月梅颶が中風に罹ったという報らせをうけて、その十六日に京都を立って、またもや西下の旅にのぼったのは、ずいぶんと無理なことであったと言えよう。山陽自身、その前日（九月十五日）子の聿庵（当時、江戸滞在中）にあてた手紙のなかで、「拙も中元後より又々去歳之疫之気味にて（全体去年餘邪とくとぬけなんだと相見、今年彼岸三月比なやみ申候）、兎角さっぱりと不レ致、段々見合（みあわせ）、終至二今日一候。少しは押て可レ参気色に相成、時候もよろしく候故、決断出立候」[47]とこのときの広島への旅行を「押して」すると言っているが、のちに述懐したところによれば、この旅の途上で、「右臂より右肋骨へかけて疼痛甚し」かったという。これは或は肋膜炎の症状であったのかもしれない。

山陽がついに喀血したのは、これより九ケ月後の天保三年六月のことである。この山陽の最後の病気についてはすでにかなりよく知られており、また、嘗て中野操氏も「書簡からみた頼山陽の喀血」[48]という随筆を書かれたことがあるが、このときの山陽の発病から死に至るまでのあらましを記するならば、およそ次の通りである。

天保三年六月十二日、山陽はとつぜん喀血したのちに山陽の妻梨影（りえ）が土佐の美濃屋忠治郎へあてた手紙には、「六月十二日よりち（血）が出、誠にけしからぬ事と存、早そく新宮へ見てもらい候所、誠にむつかしく申、ひつし（必死）のしよう（症）と申、誠に自身もかくごう（覚悟）致、門人どもより、何分〳〵くすりを御上り遊しと申候へども、主人事、ひつしなれば、くすりにおよび不レ申と申おり候へども、くすりめしあがり、其上にて御本ぶく候へば（候はねば？）ぜひなく（き）事、何分〳〵御くすりと、みな〳〵すすめ申候」[49]とあって、これによれば山陽が喀血した日に、彼を診察した医者は新宮涼庭であり、涼庭はただちにそれを不治の症と診断したようである。新宮涼庭は京都の有名な蘭法医であるが、山陽とは嘗て備後国神辺の菅茶山のもとで邂逅して以来の相識の仲であった。この喀血の日以来、薬嫌いの山陽に家族や門下生たちが服薬をしきりにすすめたことは、右の梨影の手紙によって知ることができるが、それはともかくとして血を喀いてからはさすがの山陽も酒と煙草はきっぱりとやめたらしい。「十二日より白かゆのみ、いたみ（伊丹）酒、誠にこうぶつにて、かならず日々夕方一こんづつたべ申候へども、十二日よりは酒もたばこもきんじて、自身よりたべ不レ申候」[50]と梨影も言っている。

江木鰐水撰の「頼山陽先生行状」には、この喀血と、それにつづいた数日のことが、「（天保）三年壬辰六月十二日、忽ち咳嗽を発して、血を喀す。医曰く、是れ積年、神を勞して致す所なり、所謂（いわゆる）肺血疾にして、治す可（べ）からざるなり。先生、豪傑にして、死を怖れず、故に敢て実を以て告ぐと。一医は曰く、猶療すべしと。先生曰く、死生は命あり、然も我れ、上に老母有り、且、志業未だ成らず、假令（たとえ）、一の生理無なからんも、宜しく医療を加うべし。我れ慎みて薬を服し、傍ら死計を為さんのみ」[51]と記されてあるが、

山陽の病気を不治と言った医者は新宮涼庭と小石元瑞であり、「猶療すべし」と言ったのは秋吉雲桂であった。だが、このときの山陽として気がかりだったのは、七十歳を越した老母梅颸がまだ存命しており、その母に先立って自分が死んでゆくかもしれないということであり、また、心残りなのは、心血をそそいだ著書『日本政記』を完結せずにこの世を去ってゆくことなのであった。そしてこれ以後、山陽は半ばは死を覚悟し、半ばは奇蹟の回復を祈りながら、ひたすら『日本政記』の完結やその他の草稿の整理に没頭したのであるが、その様子にはさすがに人々の感動をさそうものがあると言ってもいいだろう。梨影の手紙にはそのことが、「十三日よりかねて心がけのちよじつ（著述）の物ども、門人どもよびよせ、一両年かかりそうこう（草稿）のままに有り（しもの）みな〳〵夫をその内、自身がなほし候てうつしさせ、その外の詩文ども、はん（版）になり候物ども、ぎんみいたし、左様の世話致……」[52]というように記されている。

ところで、山陽が六月十六日附で秋吉雲桂にあてた手紙のなかには「……又一行瀉申候（是は就寢以前）、是は溏便也。其跡、腹に力なく、臓気皆々上へ釣上り申候」[53]とあって、十五日に下痢したことを報じているが、「溏」は泥で、溏便は泥のような大便という意味だろう。一方、十二日からはじまった山陽の喀血は十七日頃にはひとまずおさまったらしく、その頃の山陽は、単に気力が旺盛であったばかりでなく、肉体的にもさほど憔悴しては見えなかったようである。例えばその頃山陽を訪ねた京都の儒者猪飼敬所も川村竹坡へあてた手紙のなかで、「当月十日頃、山陽吐血セラレ、自身ハ大ニ懼レ、期レ死居ラレ候ヘ共、旁観ハ元気モ不レ易、左ハ有間舗、皆々申サレ候。一日老拙訪候処、追々快方ト被レ申、元気モ克談話被レ致候。此後保養被レ致、却テ保レ壽可レ被レ申ト存候」（六月二十三日附）[54]と言っているし、翌二十四日には山陽自身、鳩居堂主人に向って、「必死と申は、新宮涼庭、小石元瑞之説也。それにて覚悟仕居候へども、死にそうに無レ之候也」[55]と気焔をあげたりしているのである。

ところが二十七日に山陽は再び喀血し、七月十四日の未明にもまた喀血した。その日に小石元瑞にあてた手紙のなかで、山陽自身が報告しているところによれば、「昨日は御來診、乍レ毎忝奉レ存候。昨夜、如レ常。今曉未明、咳嗽甚しく、痰の出様も、かたまりと覺候もの、多く出候様存候故、いつもの如、紙にて取候て、明て後に験候処、又々如レ此の血にて、今朝に至、痰沫に少し宛まぜり出申候……唯、昨晡悪風、俄添レ衣、昨夕も其用心にて、少しあつく著て寢申候。少々盗汗出候様にて（此義は是迄も度々御座候）其跡の事にて御座候」[56]というふうで、喀血に先立って、悪感があり、また、寝汗が出たことが語られている。けれども山陽の気力はこの頃にも依然として衰えず、十九日には、早朝から駕に乗って、衣笠の福井榕亭邸を訪れ、その蔵する書画類の蟲干展示を参観したりしている。禁裏御医の福井榕亭はこの年すでに八十歳の老齢に達していたが、当時の京都で最も有名であり、最も流行った医者のひとりであった。山陽はもとよりその書画骨董を見るために福井邸を訪れたのであったが、ついでに榕亭の診察も乞うたらしい。榕亭は山陽を一診したのち、なにくれとない忠言を彼に与えたようである。

ついで七月二十五日に山陽はまたひどい喀血をした。この日及びそれにつづいた数日間の様子について、梨影は次のように語っている。

「七月二十五日、大ゐにち（血）出、誠におどろき候へども、主人事、いつこ（一向）氣ぶんかわり不レ申、おなじ事にて候へども、せがれ又二郎、弟三木三郎、二人ともよびよせ、そばに置、いしやどもよび候。塾中の門人よりかよひの人どもよびよせ候へども、何もく〳〵とんと〳〵かわり不レ申、せき（咳）につぎ、大ゐに出、夫も一せつにて、もはや其後は、つば（唾）ほどづつになり候。誠にいかがやと大心ぱいいたし居候。又〳〵四五日ほど、ち出、さつぱりとおさまり候。日〳〵自身よりも又〳〵ようじよう致、そばからも、猶さら心つけ申候。やはり高づくへにかかりて物かんがへ候。日〳〵しよくじつねの事にて、あじおいしく、たべられ申候ゆへ、私ども先氣ぶんよろしく、其上しよくじかはりなく、三度づつ少しづつにても、おいしくたべ、おかづにても、自身よりこのみ、かるきさかな、しかしおうかた白かゆにて、しようじん物がよろしく、いろかへ、品かへて御めぐみのかつを（鰹）だしに致候て、おしげなくつかい、どうぞと、さと（砂糖）かげんよく致候てたべさし候。いつも心よくたべ申候」（美濃屋忠治郎宛）[57]。

はじめはひどい喀血だったので、梨影はじめ一家の人々が集り、外から通ってくる塾生たちまでも呼びよせたが、山陽は案外に元気で、四五日後には喀血もやみ、食欲もかなり旺盛であったという。「高づくへにかかりて物かんがへ候」とあるが、この頃山陽は西洋式の机と椅子によって、讀書したり、物を書いたりしていたようである。彼が「喀血歌」という長詩を作って、その冒頭で、「吾れに一腔血あり、其の色は正に赤くして、其の性は熱」と歌い、医者からそれどころではないと叱られたのも、その頃のことであった。

だが、この年の夏はことのほかに残暑厳しく、山陽はその暑さに堪えかねたのか、二十八日から比較的に涼しい隣家の座敷を借りて、そこに移ったらしい。「当地七月殘暑になり候て、あつさたへがたく、ざしきをかり候て、出ようじよう、七月末より九月三日ごろまでいたし候」[58]という梨影の言葉によれば、山陽は九月三日頃までその隣り座敷で暮していたようである。そして八月十八日と、二十二、三日とに血を喀いたが、このように病状が一向に快方へ向かわないのに業を煮やしたのか、それともなにか感情上の齟齬でもあったのか、山陽は、それまで診療をゆだねていた小石元瑞をしりぞけて、暫く漢方医についたりした。八月十四日附で、小野招月及び蘇庵へあてた手紙のなかで彼は、「小石氏など蘭方にて色々細工、療治いたし候故、断然漢方に轉、王道にて、生死は置二度外一居候也」[59]と言っているが、その新しくついた漢方医は福井榕亭であったという。しかし、それはあまり永くつづかず、その後十日ばかりもすると、山陽はまた小石の診療をうけることに逆もどりしたらしく、八月二十六日附で弟子の後藤松陰にあてた手紙のなかに、「此節、又、福井、間に合ヌユへ、小石へ本の木阿彌となり候」[60]という言葉がある。

九月三日、山陽は隣り座敷を引きはらって、自宅へもどったが、この頃からさすがにその衰弱が目立ってきたらしい。四日には小石元瑞にあてて山陽自身、「昨冬は、寢苦しく大氐不レ寢と申ても、よき程也。瀉は、其後無レ之、時々悪心になりそうな氣味にて、飲食、居合あしき方に候、是は先日より此通に御座候へども、別て此節それを覺候也。咳は依然なれども、痰は、よく切れ、土岐色はなし。小水、相応に適し、腫は依然と申内、腹は瀉以後、少は樂に候か。気力脱は甚候」[61]と言っており、梨影の美濃屋宛の手

紙のうちには、「九月五日ごろより又〳〵よほどよわりはれ候へども、いつこ気ぶんも、もとより少もかわり不レ申、げんきよろしく、しかしながら、せきつよく、夜分よこね出來がたくいろ〳〵とかんがへて、ふし候やうとかんがへ、やはり、つくえにかかり、物どもかんがへ、そうこう（草稿）あらため申候」[62]とある。夜なかに咳がでて、安眠をとることができず、山陽自身、「氣力脱は甚候」という状態にあったのにも拘らず、彼がなお、机によって「草稿をあらため」ているそのありさまは、まるでなにかの執念につかれたようでもあるが、しかし、その平静を失わない落着きには、たしかに感嘆に値いするものがあると言えよう。なお、その頃、小石元瑞は連日、夜に來診したが、山陽はその翌朝、藥取りの使者に託して、その診寒をうけた時刻から朝に至るまでの容体を自筆で綿密に報告したのであった。いま、九月六日以後のそれを紹介すれば、次の通りである。[63]

「九月六日、悪心の氣味は、先治し申候様に御座候。飲食も、心にさわらぬもの斗、たべ候故も可レ有哉。昨、晝間は、咳は、とんと止居申候。彼間服の劑、咳にもキ、候やと存候程也。昨夕は、依然難レ臥候。一行大便、硬便通候。不レ瀉候。小水は究竟不二快通一方也」。

「九月八日、昨日も忝奉レ存候。昨夕は生二一計一、枕の仕様に活變、終不レ須二阿片一して安眠仕候…脱肛にて大困、鹽を焼き、当て候て、こらへ居申候。痢にならぬ様と存候」。

九月九日の重陽の節には、猪飼敬所が山陽を訪ねてきた。敬所は津藩の有造館へ出講することになって、山陽に見舞いかたがた別れを告げにきたのである。そのとき山陽は「與二敬所翁一話別」と題して、七絶二首を作ったが、そのうちの一首は次の通りであった。

病遇重陽意不堪　病みて重陽に遇い　意に堪えず
羨君側帽向天南　羨む　君が帽を側てて　天南に向うを
黄花老日當歸到　黄花　老いる日　當に歸り到るべし
未死猶能抵掌談　未だ死せざれば　猶お能く掌を抵ちて談ぜん

なお、江木鰐水の「頼山陽先生行状」によれば、この日、敬所と山陽の間には南北朝の正統について議論のやりとりがあり、敬所が去ったのちも山陽は、「苟くも北朝を以て正統となさば、豈新田楠諸公を以て、乱臣賊子となす乎」と主張して、それを「言うの時に方りて、目張り、眉軒り、その慷慨激烈なること、病むと雖も衰へざるなり。遂に更に正統論を著して、これを政記中の初論の後に置けり」[64]と頗る意気軒昂のありさまであったという。

九月十日に山陽はまた元瑞に手紙をだして、病状を報告した。

「九月十日、昨日も佳節御繰合、御見合被下恭奉レ存候。其後、無二別状一、昨夕も相応に眠申候内、脱肛の方難儀、痢は居然成二痢状一唯度數、唯今にては至稀少、よき事かは不レ存候へども難渋、加二病勢一可レ申候へば、大抵にて停止、変二他症一候なりとも存候。随分冷ぬ様心懸候。小水は依然淋瀝なれども、さして苦にも成不レ申候」

下痢がかなり執拗につづいているところを見れば、或は腸結核の症状も現われていたのかもしれない。

「九月十一日、昨夕も忝奉レ存候。昨夕は少々咳嗽つのり候て、難レ寝候へども、昨夕あたりより、小水、通利付候て、今朝などは快通仕、心下爽快無二此上一候。御藥、漸まわり候と相見へ候。是なれば痢の方も、さしたる事には相成申まじくと嬉しく奉レ存候」

「九月十二日、昨夕も大氐不レ寢也。小水は今朝又々たまり候故歟、よく通候。脱肛依然、新宮の膏藥用居申候。食味は随分よろしく、鼈など用可レ申哉とも奉レ存候」

「新宮の膏藥」とは脱肛の手当のために、新宮涼庭から貰った膏藥ということなのだろう。

「九月十三日、昨夕も忝奉レ存候。其後、咳、少レ眠多レ醒如レ例。小便、今朝大氐に通申候外、相替候事も無レ之……鯉魚利二小水一候効著見、私も經験御座候が、鯉魚湯(の)法之通に不レ致とも粥の菜に一切烹て、烹汁を併たべ候様の事は、如何可レ有レ之哉。鼈の義も申上候へども、腰脚腫氣、夜分もだるく候て困候位に候へば、利水急務と存付申候、如何」

「九月十四日、昨夕も恭奉レ存候。鯉魚汁、奉二御指揮一汁斗を空心にたべ申候所、今暁迄に両度小水快通仕候。御喜可レ被レ下候。それ故か、近夜に無レ之安眠仕候。今朝、氣色頗快御座候」。

「九月十五日、昨夕も恭奉レ存候。仕二御指揮一鯉汁又々申遣し、たべ申候。又々両度快通仕候。今日は糟粕下と存候……昨日、丸藥取に上不レ申候は実は怠候て一服分、殘居候也。今日は御拵被レ下候分、全然御座候に付、今日も取上不レ申候。御本藥のみ可レ被レ下候」

「九月十六日、昨夜はよく御話被レ成候……昨夕、咳、終夜不レ能レ寢候。小便は四合に少々不レ足と申候……扨て此十日ほどの処、大事に候へば、とんと臥レ辱、或坐レ辱、動き不レ申様に可レ仕と奉レ存候」

「扨て此十日ほどの処」というのはどう意味であったのだろうか。あと十日ばかりの命という意味なのか、それともこと十日ばかりが峠で、それを乗り越えてしまえば、漸次快方へ向うかもしれないと医師から言い聞かされていたのか、いずれにしても、この十六日から山陽がまったく臥床したままになったことは、のちに梨影がさまざまの人に與えた手紙によっても知られるのである。

「十六日、これより薩張と床につき、両便とも其儘にて取申(候へ共)誠に〳〵気分変りなく、書物の話を人がせぬと申いられ候」(閏十一月二十八日付、櫻田澹斎宛)[65]。

「十六日より御丸に御出遊ばし候事もいきがきれしやう仰られ候。夫れよりむつきにて取申候。小水はひようたんにて取申候……十六日よりはもはや御こけ(臥)遊し候へば、其ままにて、御夜具のままでひきまわし、たかまくらがすざり候ても、二三人よりて、かきずり上候。御めし物たくれ、私がなをし候間も、もはや其ままにして置くれ、いきがきれ、くるしくなると仰せられ候」(十月三日付、頼聿庵宛)[66]。

だが、山陽は翌十七日にも元瑞にあてて几帳面に病状の報告をしている。

「九月十七日、小子、昨夕も不レ寢なれども、一昨夕ほどには無之、先起坐、背を摩せしめ候へば咳をこらへ、其内、暫時まどろみ申候。小便は減レ半候。又々鯉汁用可レ申哉と存候事に御座候。今日は丸藥御加減可レ被レ下旨、何分よろしく願上候」。

この十七日には、江戸行きを決意した梁川星巌が山陽を訪ねてきて、別れを告げた。

「余将に東遊せんとして、京に入り、子成(山陽)の疾を問う。子成、時已に沈緜たり。曰く、千里の行、言なかる可からず。遂に一絶を賦して贈らる。輙ち其の韻を次ぎて、以て酬ゆ。時に天保壬辰九月十七夜也」[67]と星巌は言っているが、山陽がその瀕死の

病床で作った「與二星巖一話別」という詩は次のような七絶であったのである。

燈在黄花夜欲分　燈は黄花に在りて夜分たんと欲す
明朝去躅信州雲　明朝　去って踏む　信州の雲
一壺酒竭姑休起　一壺の酒竭きるとも　姑らく起つを休めよ
垂死病中還別居　垂死の病中　還た君と別る

十八日に山陽が元瑞にあてた手紙は、彼の自筆による病状報告の最後のものとなった。

「九月十八日、昨夜は不時欝蒸、又々先月廿二日の様子にて、咳嗽轟轉、終夜摩レ背させ候て、曉比、少々就寢候。先今朝迄、別症も発不レ申候…昨夕、鯉汁申遣候処、工合悪しく候歟、キキメ不レ好、小水三合強と申候。今夕は佳品を撰せ、用可レ申と奉レ存候。晝より用置候事可レ然と奉レ存候。咳は不レ関二尿之通否一處も有レ之歟と存候意有レ之」。

九月二十日には山陽の病状はもはや危篤状態に入ったと言ってもよく、梨影もまた、「廿日ごろ、御気づかひ申上候ゆゑ、御きぶんいかがと御うかがひ申上候へば、いつもかはりなく、小石ども、たいそう御むつかしく申候。誠に御気づかひ申上候」（十月三日付、聿庵宛）[68]と語っている。

山陽がいよいよその息を引きとったのは九月二十三日の「六ッどき」、つまり午後六時頃のことであった。この日弟子の関五郎（のちの関藤藤陰）はかねて命ぜられていた『日本政記』の草稿の浄書を終えて、それを病床の山陽に見せると、この書の跋を書いて置いたからそれを急いで写してくれと言われ、やがてそれを書き終えて持ってゆくと、山陽は病床で眼鏡をかけたまま、それを校閲し、五郎にいろいろ書き入れをさせ、さも満足したように寝についたという。山陽が息を引きとったのはそれから約二時間後のことであるが、その臨終の様子を語って、梨影は、「廿三日七ッ前迄、五郎子かかりうつし候。夫を又、見申候て安心いたし、半時たたぬ内ふし被レ申候所、私、むねをさすり居候。うしろにいるは五郎かと申、もはや夫きりにて候。くれ六ッどきに候」[69]と言っている。梨影に胸をさすられながら、「うしろにいるのは五郎か」と言ったまま、眠るが如くに息が絶えた山陽の最期は誠に安らかな死であったと言うことができるだろう。このとき山陽は五十三歳であった。

（註）

1　ゲーテの箴言詩集『温和なるクセーニェン』(Zahme Xenien)の第六章（Sechsyes Buch）の中にある詩。
2　『春水日記・梅颸日記』（昭和六年、頼山陽先生遺蹟顕彰会）第二四頁。
3　富士川游「偉人の病志」（『太陽』第三十巻第八号、大正十三年六月）。
4　『梅颸日記』第三一頁。
5　『梅颸日記』第三九頁。
6　木崎好尚『頼山陽全傳』（昭和六年、頼山陽先生遺蹟顕彰会）上巻、第四五頁。
7　『梅颸日記』第四四頁。
8　〃　』第七三頁。
9　〃　』第七七頁。
10　〃　』第八四―八八頁。
11　『春水日記』第二九七頁。
12　『梅颸日記』第八九―九二頁。
13　『春水日記』第三二二頁。

14 『春水日記』第三二八頁。
15 〃 』第三二九頁。
16 『梅颸日記』第一〇六頁。
17 木崎好尚『頼山陽全傳』上巻　第九九頁。
18 『春水日記』第三五五頁。
19 『梅颸日記』第一二九―一三〇頁。
20 『春水日記』第三六六・三七五・三七七頁。
21 中村眞一郎『頼山陽とその時代』（昭和四十六年、中央公論社）第三九―四〇頁。
22 『梅颸日記』第五一頁。
23 『春水日記』第二七五頁。
24 『梅颸日記』第二三一頁。
25 木崎好尚『頼山陽全傳』上巻、一八七―一八八頁。
26 『頼山陽書翰集』（昭和二年、民友社）上巻　第四九頁。
27 〃 』上巻　第七一頁。
28 木崎好尚『頼山陽全傳』上巻　第二五〇頁。
29 『頼山陽書翰集』上巻　第三〇一頁。
30 〃 』上巻　第三一四頁。
31 〃 』上巻　第三一九頁。
32 〃 』上巻　第三二九頁。
33 〃 』上巻第　三五二頁。
34 『梅颸日記』第六四〇頁。
35 木崎好尚『頼山陽全傳』下巻　第一三九頁。
36 『頼山陽書翰集』下巻　第一二頁。
37 『梅颸日記』第八〇六―八〇七頁。
38 『頼山陽書翰集』下巻　第三〇九頁。
39 〃 』下巻　第三一四頁。
40 〃 』下巻　第三二五頁。
41 〃 』下巻　第三二七頁。
42 〃 』下巻　第三三〇頁。
43 『頼山陽書翰集』下巻　第三二〇頁。
44 〃 』下巻　第三六一頁。
45 〃 』下巻　第三九二頁。
46 『頼山陽全傳』下巻　第四二六頁。
47 『頼山陽書翰集』下巻　第四〇四頁。
48 中野操「書簡からみた頼山陽の喀血」（『日本医事新報』第二〇〇一号、昭和三十七年九月）。
49 『頼山陽全傳』下巻　第五九八頁。
50 〃 』下巻　第五九九頁。
51 『事実文編』（図書刊行会。明治四十四年一月）第三巻、第四〇三頁。
52 『頼山陽全傳』下巻　第五九九頁。
53 〃 』下巻　第五〇〇頁。
54 「猪飼敬所先生書柬集」巻二（『日本儒林叢書』第三巻所収）。
55 『頼山陽書翰集』下巻　第四七八頁。
56 『頼山陽全傳』下巻　第五一一頁。
57 〃 』下巻　第五九九―六〇〇頁。
58 〃 』下巻　第六〇〇頁。
59 『頼山陽書翰集』下巻　第四九八頁。
60 『頼山陽全傳』下巻　第五二八頁。
61 〃 』下巻　第五二九―五三〇頁。
62 〃 』下巻　第六〇〇頁。
63 以下、九月十八日に至るまで、山陽が小石元瑞にあてて、その病状を報告した手紙はすべて『頼山陽全傳』下巻第五三〇頁以下に収録されているものに依った。
64 『事実文編』第三巻　第四〇五頁。
65 『頼山陽全傳』下巻　第六〇九頁。
66 〃 』下巻　第五七一―五七三頁。
67 『星巌丙集』巻六
68 『頼山陽全傳』下巻　第五七三頁。
69 〃 』下巻　第六〇四頁。

（玉川大学）

資料

近世日本医学の先覚者
相良知安文書の研究

鍵山　栄

相良氏は藤原氏で遠州相良出身で、知安七世の祖を長安といい、長崎に遊学紅毛流外科を学び、鍋島藩の医官に抱へられた。長安の子を伊安といい、その六世の孫が知安である。

七才にて藩校弘道館に入学し、十八才のとき蘭学校に入り、二十三才のとき藩の医学校に入り生徒長となり教官補をつとめ、断然頭角を顕わし、二十六才江戸遊学を命ぜられ、佐倉の佐藤舜海の門に入り、二十八才長崎にて蘭医 Bauduin について医学を修め次に精得館の長となり、三十一才佐賀に帰り閑叟侯の侍医に抜擢され、医学校教官となり、維新の際朝廷に召され、明治二年正月医学校取調用掛となる。以来専ら日本の医学教育、医療制度の創始に力を注ぎ、独乙が医学のみならず科学の部門で最も進歩していることを知り之に倣ふことに決した。しかし肝腎の文教の実力者大学別当山内容堂侯は旧知の英公使館付医師 Willis を押し相良を排斥した。このため廟堂の大評議となり、三条太政大臣を始め岩倉、大木其他列席の面前において大いに論争し、遂にドイツ医学採用に決定して日本医学及び医制の基礎を確立することになった。今日の東大医学部は知安の創設に係るものといえよう。然し好漢おしむらくは「圭角多く、協調性乏しく、自負心強く、排他的気風がある」という佐賀人の短所をそのまましかも露骨に鋭くあらわし、多くの敵を作り不運にも部下の汚職事件に連坐して失脚し、全盛時代僅かに五年、明治七年九月野に下り、以来世にかくれて医業をすて困窮悲惨な余生を送った。まことに悲劇の医傑である。

昨日まで禄高二十四万石の山内容堂侯ともあらう大々名を廟堂諸公の前で完膚なきまでにきめつけて日本医学の基礎を築いた彗星的人傑の偉業とその人となりについては石黒、緒方、富士川、金杉、入沢、田中などの記録によりかなり詳しく報ぜられているが、まだ不明な点も多い。ここに佐賀県立図書館所蔵の相良自筆の文書を記して相良研究の資料として紹介したい。

相良が医学制度創定にあたり最も努力したのは、第一、医学の範をドイツにとるべきこと、第二、医師の地位を高めこれを大学の上位におくことであったことがうかがへる。

相良家文書　一

主　意

抑皇国之医道者上古已に産霊神大已貴尊少彦名尊之三神親敷其端緒ヲ垂玉フト雖モ可惜哉世を継て興起するに暇なくして茲に外国経久の医法伝来候而時人固く是を信じ遂に法術師之業と相成後世益々其途を失ひ近頃に至り漸進歩の途は相開け候得共只西洋日新之学を追躡するのみにして畢竟皇国の医道独立之目的不相立永世外国人を引て膝を屈し彼に教を受る実に恐懼慚愧の至に御座候是以て方今大に四方海外之医法を撰ひ至理を撮揚し更に皇国の確然として速に独立いたし遂に海外に卓絶仕候途精々相調仕候処所詮左之通に無之候ては相叶間敷奉存候

一　当医学校は元来仮病院を改め姑息に学校にいたし候得は諸件真面の制は不相整生徒も年長の者多く御座候而其年令英凡に従

ひ引合修学為致候様之仕掛難取行末実は厳整の学則相立兼候得は末是我医道独立之目的には而不相叶去迚費は却而過多に相成候間来年限に一先御取止に相成候方可然存候事

一　学校兼病院は必高燥広境の地に於て当春相調候通り一切日新の規範に従ひ御築営相成度候事但築営之向は先以て至要の部より建始置漸次筑副相成候様之方組に御座候

一　教師は独乙国より壮年盛学之医英学に達し候者を御雇相成度候事

右は先壱ケ年当人を御雇可相成候一体独乙は医学万国秀絶いたし何国も規本を此に取り候訳に御座候

相良家文書　二

回　想

吾レ今ハ五十一才将サニ都下ヲ退キテ旧里ニ隠レントス。熟ラ思フ玆ニ三十五年ナリ。惟フニ吾ガ生固ヨリ粗陋ニシテ医業ニ適セス。而シテ我家ハ明歴以来二百余年紅毛南蠻二流ヲ一子相伝シテ旧佐賀藩ニ於テ世禄世業ノ外科医ニシテ本支四家合セテ六十四人扶持ト四十石ナリ。然リ而シテ吾レ本家ノ三男ニシテ支家二十人扶持ノ家ヲ継ケリ。吾レ十六才藩政改令アリ略ニ云ク医ハ長袖ニシテ世禄ノ者ニ非ス、時ニ医家七十余家世禄ニシテ凡ヘテ二千石ノ内千石ヲ削リタルニヨリ吾家ハ二十石余ヲ減ゼラル。十七才藩学ニ入リ不徳ニシテ意ヲ得ス。十九才父命ニ従ヒ蘭学校ニ入リ此ノ冬家兄二十七才マタ蘭学校ニ入ル、故アッテ吾レ学ヲ勤メス懶惰無法ナルコト三年父兄マタ之ヲ責メス。二十三才家兄漸ク大阪遊学命セラル、此ニ於テ吾レ少シク学ヲ勤ムト雖モ只放校ヲ恐ル丶ノミ、此ノ年冬始メテ医学校建ツ由テ寄宿ヲ命セラレ教官ノ一員トナル、此ニ於テ始テ真ニ勤学ス。二十五才江戸其外遊学ヲ命セラル、三年佐倉佐藤ノ門ニ入ル、時ニ父君公ニ供従シテ江戸ニ在リ、時ニ吾心ニ只父ノ老ヲ傷ムノミ而シテ亦タ学ヲ勤メズ。二十七才更ラニ長崎遊学ヲ命セラル、時ニ先輩侍医牧氏島田氏大石氏永松氏等皆斃レテ父モ亦没ス。二十九才侍医長松隈氏吾ヲ召テ曰ク此度松尾氏免ス子侍医ノ内命アリ如何、吾初メテ父命ノ耄ナラサルヲ覚リ、答テ曰ク吾方サニ研究未タ自ラ信スル能ワス松尾氏代ノ如キハ愚兄長セリ敢テ私アラズ、松隈曰吾正シク内命ヲ伝フルノミ子カ言フ処吾亦タ私カニ感スル処アリ後数日ニシテ家兄侍医トナル、而シテ吾レ格外常ニ内庭ニ出入シテ老公ノ厚恩ヲ受ケタリ。三十一才西洋遊学ヲ命セラル、遂ニ行ヲ果サス、退崎ヲ命セラル。三十三才王政復古ス感慨ニ堪ヘズ、京摂遊学ヲ願フ、許サレス、又従軍ヲ願フ、許サレス、此ノ年正シク侍医トナリ、老公ニ供奉シテ上京ス。三十四才徴士トナリ医学校ヲ専任ス。時ニ自ラ考ルニ医ハ純文ニシテ和戦ノ大義ニ与カラズ七百年来武士権ヲ執テ医ヲ賤シミ医モ亦自ラ賤シミテ至ラザル処ナシ、此ノ弱兵ヲ卒ヒテ亦タ寸義ヲナスベカラズ、憶フニ此ノ一新ハ大義名分ヨリ起テ本大学ニ貽セリ、而シテ医学ハ大学ノ外ニ在テ未タ本位ナシ方サニ今洋学盛ナルベキ形勢アッテ医学其先途ニ立テリ此ノ時ニ当テ自ラ医ヲ止メ漢学ヲ排撃シ、医学ヲ大学ノ上位ニ置キ衛生事務ヲ民部ニ設ケサル時ニハ盛者必滅ノ期アルベシ是レ労シテ功ナキナリ。又西洋大学ノ盛ナルモノハ独乙ナリ、英仏ハ害アッテ利ナシ、蘭ハ小国日々ニ衰ルノミ、蘭英ヲ斥ケテ独ヲ採ルベシ（時ニ独カ仏ヲ破リタルハ全ク大学生ノ力ナリ）此ニ於テ百方終ニ其志ヲ達シテ医生ヲシテ大学ノ上流ニ置キタルハ自ラ和戦ノ大義ニ与カラシメントナリ、此レ伊東佐藤ガ知ル処ニアラザルナリ、

吾惟タ一家ノ世業ヲ与ケテ王政ノ一端ニ附シ祖先ヲ辱メサレハ吾事足ルナリ。吾今知命退ヒテ農業ニ帰シテ天徳ヲ楽マントス。別レニ臨ンテ些カ徒労ヲ記シテ父兄ハ難フシテ学業ノ易キヲ証シ後生ノ責ヲ免レンコトヲ欲スル。

相良家文書　三

相良知安歎願書

小生元佐賀藩ニシテ元禄年間ヨリ七世西洋外科医（紅毛南蠻）一子相伝ノ家ニ生レテ固ク他ノ門ニ入ルベカラズ亦タ他ノ子弟ヲ取ルヲ許サズ（邪宗禁制ノ為ナリ）小生ガ身ニ及ンテ世運漸ク進テ勧学大ニ興リ官新ニ諸学校ヲ設為ス。小生七歳小学（新立）ニ入リ十六歳大学（新立）ニ入リ十八歳蘭学校（新立）ニ入リ二十一歳医学校（新立）ニ入リ二十五歳江戸其他ニ遊学命セラレ二十七歳長崎蘭医伝習命セラレ始テ聴講実見ニ非レハ医学成ラザルヲ知ル慶応三年蘭医ボードインニ随ヒ西洋留学命セラレ行ヲ果サズ明治元年帰藩鍋島閑叟公ノ侍医トナリ、医学校教導ニ任ス。是ニ於テ従来ノ洋書講読ノミヲ以テ世界日新ノ医学ヲ求ムルハ只影ヲ追フノ愚タルヲ以テ新ニ病院ヲ建テ洋人ヲ雇ヒ日新有形ノ実学ヲ立テント欲シ大ニ費金ヲ募ル干時藩政多端其費ニ勝ヘサルモ小生新立ノ学制ヲ順次ニ履ンテ成長シタルヲ以テ公然其所論ヲ擯ル能ハス卒カニ同公ノ供奉ヲ命セラレテ上京ス。明治二年正月徴サレテ医学校取調御用掛仰付ラレ続テ徴士トナリ下谷大病院ノ蹟ヲ承テ医学校病院設立ヲ命セラル干時王政復古神祇官太政官ニシテ祭政一政ナリ、又外務ニハ条約改正ノ難事アリ、世尚ホ攘夷家アリ皇漢医道アリ、然而シテ横浜開港以来英米ノ医学流行シテ江戸ノ医学亦英学トナレリ。茲ニ又英蘭従軍ノ医競ヒ英医ウイリス強ヒテ従軍シ、蘭医ボードイン旧約ヲ以テ京師ニ訴フ。斯ニ於テ先ツ神祇官之儀ニ順ヒ医学ノ名実ヲ述テ皇漢医ヲ鎮メ語学ト医学トヲ分明シウイリス退テ一旦ボードインヲ進メテ厚遇シ一生ノ賞典ヲ賜ヒ竜顔ヲ拝スルヲ得テ帰国セシメ新タニ独乙医学ノ採用ヲ上請シ普国ニ各科専門ノ教師ヲ雇ヒ少壮ノ医学生ヲ撰テ各科専門ヲ命シテ普国ニ留学セシメ上野ノ地ヲ請テ医学校病院ヲ建築セントス。干時普仏戦端起テ来朝ノ独乙医猶予ヲ請ヒ上野ノ建築職工乏フシテ大阪造幣局ノ工事畢ルヲ待タントス。不幸ニシテ属官利ヲ争ヒ狂生アッテ弾正台ニ訴フ。初メ単身東下シ大病院ノ後トヲ承ケ属官ノ如キハ旧ニ依リ徐々ニ之ヲ改メント欲シ、実ハ未タ其ノ至情ヲ知ラス、故ニ謾ニ一身以テ之ヲ受ケ既立ノ東校ヲ全フセント欲シテ其要領ヲ得ズ留台期年弾台廃シテ司法省ニ渡リ禁固ヲ蒙ル。此間ニ形勢一変シテ閑叟公薨シ廃藩置県トナリ岩倉木戸大久保ノ諸公大使トシテ欧米ニ出テ留学生罷メラレ、或ハ転業ス。普仏戦歇テ普医已ニ来レリ。茲ニ特旨禁固ヲ免サレ再ヒ官ニ復シテ普医ヲ賛成シ上野ノ地ヲ復シ学校病院ヲ建ントス。干時征韓論破レテ内閣変動シ木戸公文部郷トナリ、東校費ヲ拾四万円に定限シ、後亦大久保公上野ノ地ヲ揚ント欲ス。此時ニ文部ノ力点ハ南校ヲ載点トシ東校ヲ障点ニ置クノ傾キアルカ如シ。是ニ於テ医学日進独立ノ規模立タサルヲ以テ別紙給養生方法ヲ認メ大隈伯ニ依リ大久保公ニ述ルモ旨子ヲ得ズ、夫レ政務ハ臨機応変アルモ学務ハ所信ヲ易ユベカラズ。抑モ維新以来洋学漸ク盛ニシテ医学実ニ其前途ニ立テリ廃藩置県ノ後チ士族四十万家皆南校ニ向ヒ医家ハ僅ニ三万余ニシテ有力者多クハ已ニ転業之形勢大ニ変シテ文部亦タ時ニ全学ノ普及ヲ務メ医学特進ノ途ヲ失フ。是ニ於テ退官私カニ医学之隆盛ヲ祈ル今ニ於テ二十余年ナリ。今ヤ憲政成ッテ挙国皆兵トナ

リ日清戦勝テ条約モ改正シ万民自由ヲ得テ大中小学大ニ興リ各科ノ生徒皆其性ニ従ッテ自ラ進メリ小生前述ノ如ク藩政ノ学校ニ成長シ所謂ル車馬的ニシテ世情ニ疎ク明友故旧已ニ亡テ窮乏日ニ迫リ幾ンド餓に瀕シ今ヤ自由ノ聖世ニ於テ明治医学ノ史ヲ汚ガサンコトヲ恐ル。是ニ於テ敢テ歎願ス。諸君医学ノ史ヲ顧ミ小生聊カ天然ノ生ヲ保テ医学生徒ノ後ヘニ従ヒ千九百年代ノ医学ヲ傍聴シ二十余年ノ進歩ヲ称讃スルヲ得セシメンコトヲ

誠惶頓首

明治三十二年六月　　相良知安

岩佐　純殿
池田謙斎殿
三宅　秀殿
大沢謙二殿

医　学　略　史

夫レ医道ハ純文坤順ノ者ニシテ上ハ天意ヲ承ケ下ハ国憲ニ順ヒ人倫交際ノ外ニ在テ固ヨリ宗教ト関セス済生ノ一道タリ。其ノ学ハ万有窮理ニ基ヒテ世ニ彊界ナク万国普通ノ一大学ニシテ世界ノ人文ニ随テ日新開明ス。易云坤道其順乎承レ天而時行ト云フ者カ皇国ハ往古固有ノ医道アッテ存スルモ中古漢学入テ其道ヲ失ヘルカ如シ。然リト雖モ此レ日本ノ医学ハ其彊界ヲ拡メテ亜細亜ノ医学ト成リタルモノナリ。

王政衰ヘ覇府起テ終ニ邦建鎖国トナリテ此ノ道大ニ廃ル。

天和ノ偃武以来文事漸ク起リテ享保（二十年）ニ養生所ヲ建テ宝暦（六年）ニ済寿館（寛政三年医学館ト改ム）ヲ立テルモ人ハ世禄世官ニシテ学ハ信古ノ漢学ナリ、弘道ノ途ナシ。易云括嚢无レ咎无レ誉ト云フ者カ昇平数百才文学大ニ進ミ大義名分漸ク明ニシテ王政復古シ玆ニ維新ノ開国トナリ汎ク世界ノ知識ヲ求メ大学ヲ興シ孔子神農ノ廟ヲ廃ス。是ニ於テ乾元陽九ノ徳ヲ承ケ此ノ道始テ立チ学ハ大学ニ位シ事ハ内務ニ在テ行ル。易云先迷失レ道後順得レ常ト云フモノカ

始メ西洋学ノ入ルヤ元和ノ初メ厳シク耶蘇教ヲ禁シテ惟タ外科医方ノミ有効無害ナルヲ見テ殊ニ一子相伝トナシテ之ヲ許セリ。爾後長崎和蘭通商ニ於テ新来ノ薬品器械其ノ功用ヲ通詞ニ就テ私カニ之ヲ学ヒシモ後チ漸ク其医害ヲ読ミ其人ニ就テ其術ヲ習ヒ伝ルコトヲ許セリ。其間幾ント二百年ナリ。弘化元年和蘭使節来朝以来西洋火術兵法等ヲ武士ノ学ブ所トナルモ多クハ蘭語ヲ医ニ学ヘリ。安政四年始テ蕃所調所ヲ江戸ニ建ツ安政六年横浜開港以来英学最モ盛トナル。是ヲ以テ言ハ和蘭ハ洋学伝導師ニシテ医ハ其ノ高弟タリ。是故ニ維新ノ前後医中往々要路ニ採用セラル。又廃藩ノ際ニ転業スル者多シ。夫レ邦建ノ世ハ世禄世官世業ニシテ

民間ノ人才出頭ノ途ナシ。只儒ト医トノ二途アルノミ而シテ幕医ノ如キ自ラ旗士ト称スルモ僧官ニシテ若年寄支配タレバ其実ハ番匠鋳師モ同列タリシ。

明治二年大学ニ於テ医学ヲ立ツ大学東校ト云フ其学制左ノ如シ。

以下略

相良家文書　四

吾家元禄年間長崎ニ於テ紅毛南蠻ノ二流ノ外科医ヲ伝ヘテ世々佐賀藩医トシテ本支二家トナリ世禄五十四人扶持ヲ食ム吾レ本家ノ三男ナリ十四才末家ニ養子トナル但シ実子アルモ家系絶ヘタル

ヲ以テ名ノミナリ十五才養父卒ス此ノ年藩新法ヲ設ケテ医士ノ世禄二千石中ニ於テ半千石ヲ減ス吾家三十六石中二十石余ヲ奪ハル此ノ時養家ヲ去ラントスルモ身家ノ血統タルヲ以テ去ルベカラズ藩士風ヲ負テ医ヲ軽侮スルコト言フベカラズ十七才西洋火術研窮ノ為メ蘭学校建ツ吾十八才父命ニ依テ蘭学ニ入ル故アッテ学ヲ勉メズ遊惰ヲ究ム二十三才初テ学ヲ力ム二十四才藩始テ医学ヲ起シ七科ノ学則ヲ設ケテ国中ノ医生ヲ入学セシメ漢医ノ官ヲ廃シ国中漢医ヲ禁ス是ニ於テ初テ生徒ノ長トナリ先輩皆仰グ二十六才江戸遊学シ又学ヲ勉メズ只観世スルノミ二十八才長崎ニ至リ蘭医ニ親就シ始テ医学ノ大様ヲ知ル然シテ先輩皆一時ニ相継ヒ死ス家父マタ卒ス而シテ超然三四等ヲ抜擢セラレテ閑叟公ノ侍医トナリ医学教諭官トナル而シテ始テ知ル学校ノ費金皆吾輩家禄減奪ノ外ニ出ザルヲ時ニ天下多務此ノ時ニ乗シ政府ヲ振動シテ病院ヲ作リ医家世禄ヲ復セシメ時ニ維新トナリ政府ニ怨ヲ報セントス藩政亦タ吾ヲ容ル能ワス卒然徴士トナリ医学校取調ヲ命ゼラル干時自計ルニ今漸藩士ヲ屈服セシムルモ天下ノ武士医ヲ侮ドリ金ヲ与ヘサルベシ故ニ先ツ此ノ道ヲ王政ニ属シ此ノ学ヲ大学ニ位セシメ永久正税ヨリ費ヲ受ケザルベカラズト論ズベシ而シテ地方各所ニ医学校病院ヲ作ルベシ西洋医ヲ政府ヨリ定約セシメ国論ヲ定メ天下ノ学途ヲ一ニスベシ

相良家文書　五

履　歴　書

佐賀県士族　元弘庵

雙光旭日章　勲五等　相良知安

天保七丙申歳二月十六日

肥前国佐賀郡八戸町ニ於テ生

明治二年一月二十三日　一、御雇ヲ以テ医学校取調御用掛リ被仰付候事

同　一月二十三日　一、急ニ下阪蘭医ボードイン江引合可申事

但下阪ノ上先以大阪府江釣合委細相尋候事

辨事千種殿ヨリ被相達事

同　二月　一、今般医学御取立ニ付至急東京江可罷下旨被仰付候事

同　五月　一、徴士大学権判事被仰付候事

但医学所御用可為専務事

同　七月十八日　一、任大学少丞

同　十月二日　一、叙従六位

同　十月十日　一、任大学権大丞

明治三年十月　一、叙正六位

明治四年十一月十四日　一、位記被止候事

同　五年十月八日　一、文部五等出仕被仰付候事

同　十月八日　一、第一大学区医学校学長被仰付候事

同　十一月二十八日　一、大学校設立掛被仰付候事

明治六年三月十九日　一、本省出仕兼築造局長被仰付候事但医学校長如故

同　三月二十四日　一、医務局長兼務被仰付候事

同　六月十三日　一、第一大学区医学校長被免候事

同　一、築造局長被免候事

同　一、医務局長兼務被免候事

同　七月二十四日　一、補文部四等出仕

同　　十月　　一、叙従五位
同　七年九月三十日　一、免出仕但位記返上之事
同　八年十月　一、本官被免位記返上被仰付候事
同　十八年七月九日　一、文部省御用掛被仰付
同　　一、編輯局勤務被仰付候事
同　　十二月二十八日　一、非職被仰付候事
同　三十三年三月二十四日　一、叙勲五等授雙光旭日章

相良家文書　六

第三万三千五十一号

領　票

天皇陛下ハ臣知安ヲ勲五等ニ叙シ雙光旭日章ヲ賜ハリ此ニ属スル礼遇特権ヲ有セシムル旨ヲ明載セシ勲記ヲ授ケラル臣知安ハ此寵栄ヲ荷ヒ益微衷ヲ效シ貴重ナル章飾ニ耻サラン事ヲ誓フ以聞

右御執奏可被下候也

明治三十三年四月九日　　相良知安

賞勲局総裁子爵大給恒殿

相良家文書　七

相良知安系譜　藤原姓　　家紋鈎梅鉢

大職冠鎌足公後裔相良荘司頼景遠州相良ヲ領仍テ氏トス　右大将頼朝公ヨリ肥後国玖麻郡ヲ給リ　建久元年彼地ニ下向代々玖麻ノ城主タリ頼景ヨリ十二代ノ孫

◇　相良右衛門太夫長滋―頼定肥後守―長定（右衛門太夫）―同民部太夫―同右馬助―同四郎左衛門尉―同弥兵衛―同善七―

―長安　相良柳菴

寛永十八年巳五月生元禄十四年巳正月廿六日　行年六十一才卒法名柳菴常青妻ハ中島久左ェ門女享保三年戌五月廿三日　卒法名柳岳妙線長楽菴ヲ改テ同村二徳院ニ葬

明暦ノ末長崎ニ至大通辞西吉兵衛ニ従ヒ　外科ヲ学フ十余年紅毛南蠻二流ヲ伝テ鍋島志摩家来ト　成佐嘉ニ居住ス扶持九石ヲ賜フ後九石加増合テ十八石

―伊安　同柳菴

―正安　同柳菴小字源太郎中比柳可―

宝永元年申十二月生安永三年午二月十一日　行年七十一才ニテ卒法名円寂異外同味菴主高伝寺ニ葬

延享三年寅九月

北ノ御九御部屋御療養方御雇被仰付

同四年卯六月御雇ニテ

多根姫様江戸御越御供被仰付

寛延二年巳八月被召出

重茂公御匙被仰付二十人御扶持拝領

宝暦六年於江戸五人扶持拝領

同十一年午八月御目録白銀三枚拝領

同十二年未七月御目録白銀一枚拝領

同年十二月御目録金子五百疋拝領

明和七年寅閏六月

御逝去ニ依テ出家ヲ遂一代五人御扶持拝領

―徳安　同柳菴小字長太郎中比長格―

元文四年未九月九日生文化十年酉七月廿一日 行年七十五才卒
法名無着安哉
宝暦三年酉八月初而
御目見被仰付候
明和四年
重茂公御匙被仰付候
同七年寅閏六月
御逝去則
治茂公御匙被仰付江戸罷越候
安永八年亥十二月三人御扶持御加増被仰付候
寛政九年巳九月三人御扶持御加増被仰付候
文化元年子十二月御目録金十両拝領
文化二年丑正月
御逝去ニ依テ法体ヲ遂三人御扶持一代拝領

安昌同柳菴小字源太郎始元寿中比柳伯
安永二年巳十月六日生文政四年巳六月十九日 行年四十九才卒
法名寿山大椿
天明七年未九月初テ
御目見被仰付候
治茂公御世話医師被仰付候
斉直公御部屋住ヨリ御附御匙被仰付候
文化十年酉十二月三人御扶持御加増被仰付候
同十年下総様御附医師被仰付候
文政三年辰十月御同人様御逝去ニ依テ法躰ヲ遂候

宣安同柳菴小字亀次郎始柳意中比柳伯
享和三年亥十月二日生
文政二年卯八月初而御目見被仰付候
天和元年寅六月御番医師被仰付候

公安同文友小字信一郎
文政十一年子九月廿五日生
天保十二年丑五月初而御目見被仰付候
男子小字助次郎　改善次
天保二年卯八月廿八日生
男子小字広三郎改文慶　弘菴　知安
柳菴長美（鍋島直大ノ侍医家禄三十四人扶持）ノ第三子天保七年丙申歳二月十六日肥前国佐嘉郡佐賀城下八戸町北側ニ生ル郷社与賀大明神同八年南側ニ移ル
天保十三年壬寅五月材木町四丁目東側ニ移ル
同十四年癸卯痘ヲ病ム
同年国学弘道館蒙養舎ニ入学ス
女子　早生
男子　貞四郎天保十二年丑十月十三日生
女子　義弘化二年巳二月廿八日生

相良家文書　八

道の体
勇　尊ヲ成ス　力行
智　貴ヲ成ス　好学
道
親　富ヲ成ス　礼譲
愛　寿ヲ成ス　養保
ハ仁ナリ

英雄豪傑ハ勇智を重じて外より力めて内修むる者也　其優粗大にして其功速也故に危し　聖賢俊哲は親愛を本として内より力めて外に進む者也、其優精密にして其の功漸也、故に安し、譬は

文王は内より修めて進とる人也、武王は父優を似って外を力めとる人也、周公は父兄の志を継て内外を斉へとる人也、先生にはよいかげんの早道を教へ言いすてにして遁れいなさらぬ人也

（佐賀市）

アレルギー疾患に…

●副作用のない、抗アレルギー・抗炎症・解毒・肝保護作用をもつ

健保略称
強ミノC

強力ネオミノファーゲンC

包装　2ml 10管・100管，5ml 5管・50管，20ml 5管・30管
健保薬価　2ml 26円，5ml 34円，20ml 139円

●内服療法には

副腎皮質ホルモン剤療法，とくにその長期療法に併用して，その維持量を小量ならしめ，後療法に用いて再発・再燃を阻止し，同療法の終結を確実ならしめる。

グリチロン錠2号

包装　1000錠，5000錠
健保薬価　1錠　3.20円

■適応症

感冒，気管支炎，喘息，肝炎，肝障害，腎炎，ネフローゼ，血管性紫斑病，白血球減少症，自家中毒，湿疹，皮膚炎，蕁麻疹，小児ストロフルス，神経痛，リウマチ，腰・背痛，妊娠中毒，特発性腎出血，急性出血性膀胱炎，中耳炎，副鼻腔炎，口内炎，フリクテン，結膜炎，角膜炎，薬物過敏症など

2 B5014

【文献進呈】ミノファーゲン製薬　東京都新宿区新宿3—31　（〒160）

日本医史学会々則

第一条　本会は日本医史学会と称する。

第二条　本会は医史を研究しその普及をはかることを目的とする。

第三条　本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

一、年一回、総会を開く。

二、本会の機関誌として『日本医史学雑誌』を発行し、これを会員にわかつ。

三、随時、地方会、例会を開き、研究発表、展観などを行なう。

四、日本の医史学界を代表して内外関係学術団体との連絡協力をはかる。

五、その他の事業。

第四条　本会の主旨に賛成しその目的達成に協力しようとするものは、理事または評議員の紹介を経て会員となることができる。

第五条　会員は会費として年額二〇〇〇円を前納する。ただし外国に居住する会員は年額一〇ドルとする。

会員は研究発表および本会の事業に参加することができる。

本会に名誉会員と賛助（維持）会員をおくことができる。名誉会員は本会の事業に多大の貢献した者を評議員会の議をへて推せんする。賛助会員は本会の趣旨に賛同し、年額一万円以上を収める者とし評議員会の議をへて推せんする。

第六条　本会に次の役員をおく。

一、役員は理事長、会長、理事、監事、幹事とする。

二、理事長は一名とし理事会で互選し本学会を代表する。

三、会長は年一回の総会を主催し、その任期は総会終了の日までとする。

会長は理事会の推せんにより理事長が委嘱する。

四、理事は若干名とし、理事長を補佐し会務の遂行にあたる。

理事、監事は評議員の中より評議員会の推せんにより理事長が委嘱する。

五、本会の実務を処理するため、常任理事二員、幹事若干名をおく。常任理事は理事より、幹事は

会員より理事長が任命する。

六、役員の任期は二年とし重任を妨げない。（ただし会長を除く）

以上の役員は総会の承認を得るものとする。

第七条　評議員は若干名とし、普通会員の中より理事会の推薦により総会で決める。

評議員会は本会の重要な事項を議決する。任期は役員に準ずる。

第八条　本会の事務所は順天堂大学医学部医史学研究室内（東京都文京区本郷二の一の一）に置く。

第九条　本会は理事長の承認により支部または地方会を設けることができる。

第十条　会則の変更は総会の承諾を要する。

『日本医史学雑誌』投稿規定

発行期日　年四回（三月、六月、九月、十二月）末日とする。

投稿資格　原則として本会々員に限る。

原稿形式　原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表題、著者名のつぎに欧文表題、ローマ字著者名を記し、本文の終りに欧文抄録を添えること。

原稿枚数　原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書きのこと。

原稿の取捨選択、掲載順序は編集委員が行なう。また編集の都合により加除補正することもある。

表題、著者名、本文（表、図版等を除く）が五印刷ページ（四百字原稿用紙で大体十二枚）までは無料とし、それを越えた分は実費を著者の負担とする。但し欧文原著においては三印刷ページまでを無料とする。図表の製版代は実費を徴収する。

校正　原著については初校を著者校正とし、二校以後は編集部にて行なう。

別刷　投稿者には論文掲載紙を五部無料贈呈する。別刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。

原稿送り先　東京都文京区本郷二丁目一の一　順天堂大学医学部医史学研究室内　日本医史学会

編集委員　大鳥蘭三郎（委員長）　石原　明　杉田暉道　大塚恭男　酒井シヅ　沢井貫太郎

日本医史学会役員氏名（五十音順）

理事長　小川　鼎三
会長　山形　敞一
常任理事　石原　明　大鳥蘭三郎
会計監事　宗田　一
理事
赤松　金芳　阿知波五郎　石川　光昭
今田　見信　内山　孝一　大久保利謙
大塚　敬節　大矢　全節　緒方　富雄
岡西　為人　蒲原　宏　佐藤　美実
杉　靖三郎　鈴木　正夫　鈴木　勝
宗田　一　竹内　薫兵　津崎　孝道
戸苅近太郎　中野　操　三木　栄
矢数　道明　吉岡　博人　和田　正系
酒井　シヅ　佐藤　美実　清水藤太郎
杉　靖三郎　杉田　暉道　鈴木　正夫
鈴木　勝　鈴木　宜民　宗田　一
高木圭二郎　高山　担三　竹内　薫兵
田中　助一　津崎　孝道　津田　進三
戸苅近太郎　中泉　行正　中川　米造
中沢　修　中西　啓　中山　沃
長門谷洋治　中野　操　服部　敏良
福島　義一　藤野恒三郎　丸山　博
松木　明知　三浦　豊彦　三木　栄
三廼　俊一　森　優　谷津　三雄
山形　敞一　矢数　道明　山下　喜明
山田　平太　吉岡　博人　和田　正系
以上

幹事
大塚　恭男　酒井　シヅ　沢井貫太郎
杉田　暉道　谷津　三雄

日本医史学会評議員氏名（五十音順）

赤松　金芳　安芸　基雄　阿知波五郎
石原　明　石田　憲吾　石川　光昭
今市　正義　今田　見信　岩治　勇一
内山　孝一　大鳥蘭三郎　大塚　敬節
大塚　恭男　王丸　勇　大矢　全節
緒方　富雄　小川　鼎三　岡西　為人
片桐　一男　川島　恂二　蒲原　宏
金城　清松　久志本常孝　榊原悠紀田郎

編集後記

今年の総会が九月に仙台で行われることから、三号の印刷は仙台で行われた。これには東北大医学部山形内科の三浦清美先生にひとかたならぬお世話になったことを会員諸氏に報告し、感謝を表したい。

今年の特別講演は「蘭学」に主題を置き、この方面に造詣の深い諸先生の話を伺えるのは甚だ意義深い。

この号が総会号となった為、例会記事などを掲載できなかったが、前号にひき続き、「評伝」欄に富士川英郎氏の「頼山陽の病志」を載せた。富士川氏は凡そ察せられたと思うが、医学史界の泰斗富士川游氏の御子息であり、現在、東大停年退職後、玉川大学で独文学の教鞭をとられている。

昭和四十七年九月二十五日　印刷
昭和四十七年九月三十一日　発行
日本医史学雑誌
第十八巻　三号
編集者代表　大鳥蘭三郎
発行者　日本医史学会
代表　小川鼎三
〒二一三　東京都文京区本郷二-一-一
順天堂大学医学部医史学研究室内
振替　東京　一五二五〇番
印刷者　笹気出版印刷株式会社
〒九八〇　仙台市上杉一-一四-一

最新刊

体系・世界医学史

(書誌的研究)

医学とは何か・医学史とは何か

A SYSTEMATIC HISTORY OF WORLD MEDICINE

(Bibliographical Study)

What is Medicine? What is the History of Medicine?

Sakae MIKI, M.D. $50.00

医学博士 三木 栄 著

B5判 総900頁／￥12,000 〒 都内210 地方500

生命畏敬の一語につきる医の本質を探り，全科の医学知識を統合して，細分化に迷う医学史の本幹を示す．また，これを実証に移すため，世界医学**編年**史・世界医学**史的業績**目録・世界医学**原著**目録をも明細に合わせ編んだ著者多年の精魂をこめた研究成果．医学史研究の源泉を究め，医学の根本理念を探るに格好の指標である．

第Ⅰ部／総論 医学とは何か 医学の本体は東西一元・人類共通である 医学史とは何か

第Ⅱ部／編年史 現生人類発祥原始期／太古 10000B.C.－3000B.C.／上古／農耕開始 3000B.C.－500B.C.／初世／文書時代に入る 500B.C.－500A.D.／上世 500A.D.－1500A.D.／中世 1500A.D.－1900A.D.／近世 1900A.D.－1950A.D.／現代

第Ⅲ部／世界医学・史的研究業績解説目録 世界医学史総史 科学史 各国医学史 各分科医学史 疾病史 薬物薬理学史 医考古学 看護学史 医学教育史 社会医学史 医学思想・哲学 医学と文芸 絵画・芸能・風俗・その他 医人伝 医書誌・目録類 医学古典叢書類 医史学定期刊行書 医史辞書類 医史学研究法 各国医学博物館図書館

第Ⅳ部／世界医学主要業績－原著解説目録(時代別・各科別・各地域別) 現生人類発祥原始期(太古) 10000B.C.－3000B.C.(上古) 3000B.C.－500B.C.(初世) 500B.C.－1B.C.(上世) 1A.D.－500A.D.(上世) 500A.D.－1000A.D.(中世) 1000A.D.－1300A.D.(中世) 1300A.D.－1500A.D.(中世) 1500A.D.－1600A.D.(以下近世) 1600A.D.－1700A.D. 1700A.D.－1800A.D. 1800A.D.－1850A.D. 1850A.D.－1900A.D. 1900A.D.－1950A.D.(現代) 1950A.D.－

総索引 人名索引 件名索引

医歯薬出版株式会社 東京都文京区本駒込1-7-10 〒113／☎(03)944-3131(大代)・振替東京13816

Ishiyaku Publishers, Inc. 7-10, Honkomagome 1-chome, Bunkyo-ku, Tokyo, Japan

■多くの疾患に
すぐれた効果が
期待できる

経口用セファロスポリン系抗生物質

ケフレックス®

Keflex

一般名 セファレキシン

健保採用

カプセル・錠(割線入り)・懸濁内服用・シロップ用細粒

Lilly イーライ・リリー社製品 シオノギ製薬

LUCIDRIL

頭部外傷・脳術後・脳卒中の意識障害には

本剤は大脳皮質―脳幹網様体，視床下部―下垂体系にはたらき，神経細胞の酸化―還元過程および糖代謝に影響をおよぼし，意識障害を改善，または低下した意識水準を高揚するものと解されている．

●適応症

ルシドリール錠　頭部外傷後遺症におけるめまい．

注射用ルシドリール　頭部外傷，脳術後，脳卒中の意識障害，頭部外傷後遺症におけるめまい．

●包装

ルシドリール錠(100mg)　100錠　500錠　1,000錠　3,000錠

注射用ルシドリール(250mg)　5バイアル　50バイアル

(750mg)　10バイアル

●薬価基準

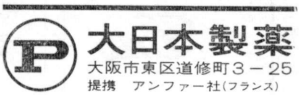
1錠(100mg)　32.20円　1バイアル(250mg)　750.00円

⊙本剤は製品説明書の「使用上の注意」をよく読んでお使いください．

脳代謝改善剤

ルシドリール®

塩酸メクロフェノキセート



大阪市東区道修町3－25

提携　アンファー社(フランス)

日本医学史名著シリーズ

第一集 **東洞全集**
呉秀三 富士川游 編
A5判・760頁
定価 6,500円
蘭学移入以前、東洋独自の治療医学を自らの手を以て確立した古医方の巨擘吉益東洞の全貌を集大成。

第二集 **呉氏医聖堂叢書**
呉秀三 編
A5判・940頁
定価 7,500円
呉秀三博士は和漢の医書をよく収集され、その内、博士の専門である精神病学に関する江戸時代の書物をまとめた一大資料書である。

第三集 **杏林叢書〈全二巻〉**
富士川游他編
A5判・1400頁
定価10,000円
大正十年から五年間に亘って刊行された我国の医学随筆大集成。

第四集 **華岡青洲先生及其外科**
呉秀三 著
宗田一 補訂
A5判・540頁
定価 6,500円
我国外科史に一大革新を来した青洲の学問上の系統及び事業を明らかにした呉博士の代表的名著。

第五集 稿本 **日本眼科学史**
小川剣三郎著
A5判・220頁
定価 3,300円
小川博士の代表的著書で我国眼科史の名著。

第六集 **日本産科叢書**
呉秀三 著
A5判・1350頁
定価 9,000円
明治28年の刊行で産科史珠玉の原典が網羅され、我国産科学の集大成。原典40部と賀川学統前後・蛭田学統、その他の六集に分かれる。

第七集 **人蔘史〈全七巻〉**
今村鞆 著
A5判・3930頁
定価55,000円
編年記思想篇・政治篇・経済篇・栽培篇・医学篇・雑記篇・蔘名彙巧篇の全七巻の大著で人蔘に関する古今の資料は悉くこゝに集積。

第八集 **箕作阮甫**
呉秀三 著
菊判・430頁
定価 5,500円
日本の近代文明の発展に蘭学を修めた医学者の一人である箕作阮甫の伝記であり、呉博士の名著である。

第九集 **よはひ草〈全六巻〉**
A5判・1400頁
かがり装・帙入
定価12,000円
本書は昭和3年から6年に亘り、小林商店広告部（ライオン歯磨株式会社）が刊行。民俗学・風俗学・文化人類学の分野からも必須。

第十集 **泌尿器科学史**
大矢全節 著
A4判・630頁
定価 9,000円
太古エジプトの史実より説き起して、西欧における泌尿器科学の発達を興味深い挿図を添えて詳述。

京都市下京区中堂寺西寺町4 **思文閣** 振替京都8487・電 801−2375

医・薬・化

全国 医学・薬学・化学・雑誌広告取扱
本 誌 広 告 一 手 取 扱

本誌広告取扱
合資会社 日本医学広告社
東京都千代田区神田駿河台2－9
日本医事新報ビル
電 話 (03) 292－6961 (代表)

Members' Presentations

Kumajiro Ishida in the History of Medical Radiological Technique ····· Masayoshi IMAICHI ·· (13)
On the Historical Study of Medical and Paramedical Education in Japan ····· Yukio SHIBATA ·· (13)
Studies on History of School Health in the Meiji Era (9) ····· Morikuni SUGIURA ·· (14)
The Medical Dissection performed by Dr. Ryoetu Hosino. ····· Sosogu NAKAYAMA ·· (16)
On the Birth Place of Fujii Hotei ····· Hirom KAYAHARA ·· (18)
Ohota Yosei and his Book ····· Shigeaki TSUCHIYA ·· (18)
In Dr. Riichiro Saeki's (1862–1953) Diary of Study abroad in U.S.A., Germany, Austria and Great Britain (1886–1891). ····· Goro ACHIWA (19)
Prof. Kouranoskuke Moteki, méritant d'un courant alternatif entre la médecine francaise et celle japonaise ····· Akira FURUKAWA ·· (22)
Über die "ontleedkundige Tafelen." (1) ····· Hisashi SAKAI ·· (23)
A Comparative Study on the Kaitaishinsho and the revised Kaitaishinsho. ····· Shizu SAKAI ·· (25)
"Seisetsu-Naikasenyo", the first translated Book of internal medicine ····· Tochio OOTAKI ·· (26)
Genetics in "Shokugaku-Keigen" ····· Ichiro YABE ·· (27)
A Study on "Utatsuyama Yojoho" ····· Shinzo TSUDA ·· (28)
Medical Treatment in Babylonia ····· Tetsuya SUZUKI ·· (29)
Comparison of Classical Indian Medicine and Medicine of Buddism ····· Kido SUGITA and Akira ISHIHARA ·· (30)
Twelve Months of Japan: Etymology and Biology ····· Takuji MIWA ·· (31)
The Population Rate in the NARA Era ····· Eiko HINO ·· (32)
Studies on "Igaku Tenshoki" Part II ····· Dōmei YAKAZU ·· (33)
The Medical Consciousness and its Initiation of the Feudal Lords during the Sengoku-era. ····· Yoshimi MIYAMOTO ·· (34)
"Enju-do", a Resthouse for Zen-shu Priests. ····· Masao SEKINE ·· (35)

Resistant Movement of KAMPO (China medicine) in Tokushima ····· Giiti FUKUSHIMA ·· (36)
Hygiene in the Old Testament. ····· Yoshimi OZAWA ·· (37)
Médecine occidentale et mathemathiques. ···· Zensethu OOYA ·· (38)

●幻の二大医学史決定版の復刊ここに実現！

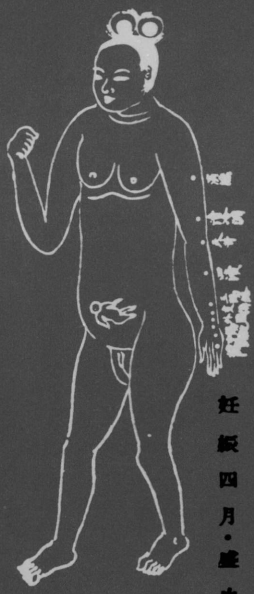
日本醫學史

富士川　游著

●別冊附録―富士川本目録

京都大学蔵―菊判一六〇ページ

体裁：(本文)三菱製紙特漉菊判49キロ
(製本)巻見返し・紬表紙・函入り
内容：(本文・医事年表・著作目録)菊判1064頁・口絵8枚
配本：8月20日
定価：11,000円



西洋醫術傳來史

古賀十二郎著

体裁：(本文)三菱製紙特漉菊判49キロ
(製本)巻見返し・布製表紙・函入り
内容：(本文・索引)菊判544頁・口絵24頁
配本：8月5日
定価：7,000円

●人工臓器学術セミナーシリーズ

心臓ペースメーカー治療の実際

●基礎：電気生理機器の基礎――東京医科歯科大学：戸川達男
刺激伝導障害――大阪医科大学：河合忠一
●臨床：緊急臨床――東京大学：三井利夫
不整脈――聖路加国際病院：五十嵐正男
機種の選択と植込み――慶應義塾大学：川田志明
●長期管理：ペースメーカーの長期管理――東京女子医科大学：堀　原一

2,800円(〒150)

●循環器学雑誌(月刊)

心臓

巻頭言・臨床論文・入門シリーズ・海外だより

600円(〒50)

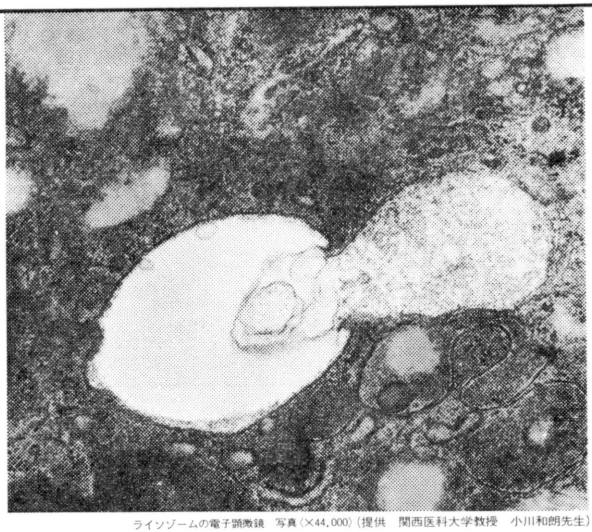
●人工臓器学雑誌(季刊)

人工臓器

巻頭言・展望座談会・研究論文・速報

600円(〒150)

発行：形成社　発売：(株)医事通信社
東京都港区赤坂4―4―15　電話(03)585―4041：振替東京4526



ライソゾームの電子顕微鏡　写真（×44,000）（提供　関西医科大学教授　小川和朗先生）

抗炎症の作用機作の一つ

生体膜安定化作用の強力な

●鎮痛・抗炎症剤

ノンフラミン®

（一般名＝塩酸チノリジン）　カプセル

ノンフラミンは強力な生体膜（ライソゾーム膜など）安定化作用を示し、しかもこの作用は抗炎症作用、鎮痛作用と高い相関性を示すことが確かめられています。

当社研究・創製品

薬価基準新収載

〔包装〕カプセル（50mg）〈コード番号：Y-NO50〉
＝100・500・1000カプセル
〔薬価基準〕1カプセル当り￥28.00

● 〈使用上の注意〉等については現品説明書をご参照ください。
● 文献等ご要望の向きは吉富製薬学術部（大阪市東淀区内）まで。

製造＝吉富製薬株式会社
販売＝武田薬品工業株式会社

207-B1

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japan Society of Medical History

Vol. 18. No. 3 Sept. 1972

CONTENTS

The 73 th General Meeting of Japan Society of medical History

Special Lectures

Rangaku (Dutch Learning) in Sendai ····· Shoichi YAMAGATA··· (1)

TAKANO CHOEI and Rangaku ····· Ranzaburo OHOTORI··· (6)

Rangaku in Osaka ····· Misao NAKANO··· (9)

Members' Presentations. ····· (13)

Biography

Rai Sanyo, Eine pathographische Studie ····· Hideo FUJIKAWA··· (41)

Materials ····· (51)

Miscellaneus ····· (59)

The Japan Society of Medical History
Department of Medical History
Juntendo University, School of Medicine
Hongo 2~1~1, Bunkyo-ku, Tokyo.